

ウマ娘を曇らせたい。  
あわよくば心配された  
い

らつきー(16代目)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

某Twitter漫画に思いつきり影響を受けました。ウマ娘に心配してもらう話  
です

凄い今更ですがレースの成績とかは現実とはリンクさせるつもりは無いです

# 目次

アドマイヤベガ	1
ゴールドシップ	1
アグネスタキオン	1
シンボリルドルフ	1
シリウスシンボリ	1
【閲覧注意】ダメお姉ちゃん持ちのカレン	1
チャン	1
エアグルーヴ	1
シリウスシンボリ。その後	1
	113
	99
	81
	66
	50
	35
	19
	1



# アドマイヤベガ

最近、元気がないな、とは思つていた。

もともとトレーナー業というのは激務であるというのはなんとなく理解している。毎日練習メニューを考えていたり、レース出場の手続きやらマスコミへの取材対応やらをしていたり。夜遅くにメッセージを送つても返信が返つてくるあたり夜きちんと眠っているのかも怪しいところがある。

なにかしてあげられることでもないだろうかと少し考えて、思いついたのは食事を作つてあげることだった。昔サンドイッチを作つたときに美味しいと言つてくれたから。栄養補助食品などではなくちゃんとした物を食べて欲しいというそんな気持ちで。

それに関しては、成功したと言つていい……のだと思う。少なくとも、美味しいと言つて食べてくれたし、事実一つも残ることなく完食された。

だけど。問題なのはそんなことではなくて。

食事をするときには手を持ち上げる。そのときに少し捲れた袖口から見えた白い包帯。

その場で手首を掴んで問いただしたい気持ちと、知りたくない、見たくないという気持ちが同居していた。

「……手首、どうしたの？」

なるべく平静を装つて、結局本人に聞く。杞憂であつて欲しいけど、偶然でそんなところを怪我するとは思えないし……そういうことなのだろう。

「え？ あー……ちょっと……ほら、料理しようとしたら失敗しちゃってさ。不器用な人が急にやり始めちゃ駄目だね」

「…………そう」

嘘だ、なんてことはすぐに分かる。彼女は料理するタイプの人間ではないし、そもそも料理をして指ならともかく、手首を切るわけもないだろう。

(リストカット……よね)

自傷行為としては最もポピュラーなものだろう。刃物を使つて、自分の手首を切る。そんな単純な行為。致死性としては低いが、エスカレートしていくばどうなるかは分からぬ。

(とにかく、感情的にならないように)

怖がる、怒る、叱る。どれも悪手だ。とりあえず傷の処置はしてあるのだから、今すぐどうこうなるわけでもない。冷静に……というのは少し、難しい。一先ず私が落ち着かない。

「…………じゃあ、走つてくるから」

「ん。行つてらっしゃい。お昼、ありがとね。あと——」「やりすぎないように。分かつてから」

走れば、少しばかり気も紛れるだろう。そう思つていたのだけれど。

(……集中できない)

どうしても、あの白色が頭にちらつく。何故? どうして? 頭に浮かぶのはそんな言葉ばかり。走つても、トレーニングをしていても。

集中力を欠いた状態で続けても意味はないだろう。単純に危険もある。

(聞いてみる……しかない?)

誤魔化された以上、追及しても教えてくれないかも知れないけれど。それでも、何か悩みを聞いたり、愚痴に付き合つたり、そのぐらいはできるだろう。

いつもより相当早く練習を切り上げて、トレーナーのところへと戻ることにする。時間をおいたおかげで少しばかり落ち着けたから、多分、大丈夫。

「あれ? 早いね。なんかあつた?」

カタカタとパソコンでなにやら作業をしつつ、いつもと変わらない様子で。いつもと変わらない態度で話しかけてくる。何かあつたというならそっちの方だろうに。

「私は、別に。……むしろ、あなたの方でしよう?」

「……なんのこと?」

キーボードを叩く音が止まる。

「手首、どうしたの? 本当の事を教えて」

「だから、ちょっと失敗して切つただけだつて」

「あなたがそんなことするとは思えないのだけれど。……ねえ、言いにくいのかもしれないけど。……何かあるなら、話して」

「何? 心配してくれるので?」

「ちが……! ……わ、ないけど。いいでしょ。心配したって」

「……大丈夫。アヤベには、関係ないから」

「なに……それ……」

『関係ない』という言葉の意味。私のせいではない、という意味ではないだろう。関係ないから、関わるな。要は、拒絶。

今まで。三年以上共に過ごしてきて、初めてのトレーナーからの拒絶。

思わず泣きそうになつて、何も言い返せなかつた。

「そんなことよりさ。アヤベ、酷い顔してるけど。体調悪い? 早めに休んだほうがいいんじゃない?」

そんなこと、なんて一言で片付けないで。私にとつてあなたは——

(彼女は、何?)

担当ウマ娘とトレーナー。最初の三年間を乗り越えた相棒。気のおけない友人?……いくら拒絶しても付いてきた、よくわからない人。

どれも正しくて、どれも間違っているような気がする。

「あ。あとさ、明日なんだけど。どうしても外せない用事入っちゃってさ。悪いんだけど——」

「そう。じゃあ、私も明日は休もうかな」

私の言葉に、露骨に驚いた顔をしてくる。まあ確かに、私から休みを言い出すなんて珍しいことだろうけど。どうせ、一人で練習すると思われていたのだろう。

今は少しだけ、時間が欲しかった。トレーナーとどう接すればいいのかとか、まあそんな事を考えたかったから。

彼女は私にとって、何なのだろう。こんなに心を乱されるのは、どうして?

「……めんなさい。今日は、帰る」

「謝んなくていいよ。お大事にね」

別に、体調が悪いわけじゃない。ただ頭の中がぐちゃぐちゃで、上手く考えがまとまらないだけ。

部屋から出る前に、トレーナーの方へと視線をやる。

袖口からわずかに覗く白い包帯が、やけに印象に残った。

結局その日は何もできず、暗い部屋で独りで眠つた。

星の見えない夜だつた。

目を覚まして、なんとはなしにもう一つの空のベッドを見やる。レースの遠征の為に持ち主が不在のそこ。

彼女だつたら。私と違つて他人とのコミュニケーションが上手な彼女なら。こんな風に思い悩みもしないのだろうか。

どうしたらいいのか、彼女が居たら相談もできたかもしないけど、流石にレース前にこんな事を言うわけにも行かないだろう。

インターネットで『リストカット』だと『メンタルヘルス』だとそんな言葉で検索する。出てくるのは落ち着いて話を聞きましょうとか、自殺のサインを見逃さないようだとか、あまり役に立たない一般論。

(話……用事があるつて言つてたけど)

メツセージアブリを起動して、少し迷つてから通話のボタンを押す。何度かコール音がなつて、応答なしの表示。

用事中、だろうか。『気がついたら連絡をお願いします』とメッセージを残しておく。いつ連絡を入れてもすぐさま返信してくる彼女のことだ。用事が終われば向こうから電話でもかけてくるだろう。だからそれまで、適当に時間を潰して過ごそう。

そんな考えで。数時間経つた。

(……遅い)

用事がなんなのか、聞いておけばよかつた。まだ終わらないのか、それとも。(私と、話したくない?)

それは、泣きたくなるような仮定——何故?

子供の頃から、ずっと独りだった。あの子に恥じない私でいるために、他人と関わっている余裕なんて無かつた。人が離れていてもなんとも思わなかつた。

(でも、トレーナーが離れていくのは……嫌)

勿論、学園で出来た友人達もそう。でも、トレーナーはその中でも一際。

……トレーナーは私にとつて、何? ……私はトレーナーにとつて、何?  
考えれば考えるほど分からなくなつて、答えは出なかつた。

(早く、返事してよ……)

結局。その日返信が来ることはなかつた。  
久しぶりに。息苦しい夢を見た。

翌日。顔を合わせたら返事してくれなかつた事について聞いただすか、否か。そんな事を考えつつトレーナー室へと向かつて、彼女の顔を見た瞬間、すべての思考が吹き飛んだ。

「おつかれーアヤベ。ごめんね、昨日は携帯見てる余裕無くつてさ」「なに……それ……」

いつもどおりの明るい様子で、話す内容にもおかしいところは無い。

ただ、目元の痣と頬に貼られた湿布が、異様な雰囲気を出していた。  
「え？ あー……ほら、階段を踏み外して……」

彼女の言葉を無視して、スーツの裾を捲つてお腹を見る。  
外れて欲しかつた予想の通りに、そこには赤黒い痣が——

「…………脱いで」

「え!？」

「服。隠せないように」

自分でも驚くような、凍つた声が出た。そのおかげ、か分からぬけど、観念したのか従つてくれた。

腹部、腿、腕。至るところに痛々しい痣。赤黒い最近付いただろうモノ。青紫の時間

が経つただろうモノ。

「あの……もう服着ていい？ 流石に恥ずかし——」

「誰が、やつたの？ ……もう、誤魔化されないから」

暫く、沈黙が続く。やがて根負けしたのか、ゆっくりと口が開かれる。

「…………彼氏」

「…………悩んでたのも、それ？」

こくり、と首が縦に振られる。

こういう時、どうすればいい？ 警察でいいのだろうか？

携帯を取り出して——その手首を、掴まれる。

「…………お願い。それは、しないで」

被害者の癖に、加害者のような顔をして。彼女は私に懇願してくる。

「悪いのは、私なの。私が、怒らせちゃったから……」

何を言つているのか、分からない。彼女の事を何も知らないのだと、思い知らされた。

「事情は、知らないけど……そんな身体をしといて、何を」

「お願い。私達の問題だから、見なかつたことにして。アヤベには、関係無いから」

また。またそういう事を言うの。

「関係無く……ない。だつて……」

「だつて、何？……アヤベは私の……ううん。私は、アヤベの何？」

答えなくてはならない。そう直感した。ここで口ごもつたら、彼女と一度と会えなくなるような、そんな気がした。

「あなたは…………大切な、人。私の……私が、好きな人」

よくわからないなりに考えて、絞り出せたのはそんな答え。

「ずっと、一緒に居たい人。力にぐらいならせてよ。私は、まだ何も返せてない……！」

ぽん、と頭に彼女の掌が乗る。

「ありがとう、アヤベ。……ねえ、一つどうしても言わなきやいけない事があるんだけど、いい？」

「…………に？」

また拒絶されるのだろうか。いよいよ嫌われてしまつただろうか。落ち着いて聞いてね？ との前置きを聞いて、彼女の言葉を待つ。

「…………その、ね？…………全部、嘘なんだ」

「…………嘘つて？」

「…………の癌、メイクなんです。手首もこの通り……なんともありません」

「は？」

するすると包帯を外した下には、傷一つ無い綺麗な肌があつて。おそるおそる癌をこ

すつてみれば、確かに指先に色が付いた。

「が、軽いドッキリのつもりだつたんだけど……その……一発殴るぐらいで済ませて欲しいなあ、なんて……」

怒りとか、呆れとか。そういう感情も確かにあつた。だけど一番強かつたのは――

「わー！ アヤベ！？ ちよつ……泣かないで！！ ごめんよ～！」

安堵から、だと思う。溢れてくる涙が止まらなくて。暫くトレーナーの胸で泣いていた。

「落ち着いた？」

「……そもそも、あなたのせいだと思うのだけど

「う…………すみませんでした……」

ウマ娘だつたら耳も尻尾も垂れ下がつていそうな、そんな雰囲気で謝つてくる。

……本当に、なんでこんなのが好きになつたんだろう。思わずため息が零れる。  
「こういうこと、二度としないで」

「すみません……許してください。何でもするので……」

何でも、という甘美な響き。なら、少しごらい我儘を言つても構わないか。

「……前、カレンさんが連れて行つてくれた、パンケーキ。……もう一度、行きたい」

「奢らせていただきます！」

一緒に行つてくれるのなら、それで満足ではあるのだけど。面白そそうだからそれは言わない。

「今度、プラネタリウムに行きましょう。ちょっと遠くに良さそうな所があつて、車が欲しかつたの」

「……頑張つて休みを作ります」

今なら本当に何を言つても受け入れてくれるのではないか。そんな、少し悪い考えが浮かぶ。

「……これからも、ずっと私と一緒に居て」

「はい、もちろん……え？」

「ダメなの？」

「……アヤベ、私のこと好きすぎない？」

「一発、殴つたほうがいい？」

「すみませんでした」

「混ぜつ返す癖は今はやめてほしい。こつちは本気なんだから。

「……好きよ。悪い？ さつきの、本気だから」

本当に。なんでこんな人を、とは思うのだけど。多分、理屈じやない。

答えを待つ——間もなく、再びトレーナーの胸へと顔が埋まる。少し遅れて、抱き締められていると気づいた。

「……アヤベが私を見捨てない限り、ずっと一緒にいるよ。私の人生、アヤベにあげる」重い、とは思う。彼女が、ではなく。お互いに。

でも、私達にはきっとこれぐらいが丁度いい。

こんなくだらない冗談でそんな事に気付かされたのは、少しだけ癪だけど。



「うう……栄養が足りない……」

仕事。仕事。仕事。ただひたすらに忙殺されている。

トレーニングメニュー、グッズの収益の諸々、新グッズ案のチェック、レースの手続き……は、今は無い。

「癒やし……癒やしが欲しい……」

担当ウマ娘が人気になればなるほど仕事の量が増えていく。その分手当も出てはい

るのだけれど、使う暇が無ければ貰つていないので同じようなものだ。

「ウマ耳……尻尾……ふわふわ……」

土下座して頬んだら尻尾ぐらい触させてくれないだろうか。嫌な顔されながら下着を見せてもらうアニメーションがあつたけれど、アヤベも割としてくれる気がする。軽蔑されたくはないけど。

どうせ見るなら泣き顔とか曇った顔とかそつちがいい。女の子の泣き顔からしか撮れない栄養がある。再来年ぐらいには学会で発表されるはず。

……曇った顔が見たいなら、自分で作ればいいのでは?

幸いなことに、私が担当しているウマ娘はそつけない態度をとるくせに面倒見がよく、愛想が悪いくせに心配性で、耳に感情が現れやすい。

「よし! 手首ぶつた切るか!!」

仕事の疲れでおかしくなつたテンションで刃物を手首に当てたところで、その冷たさにちょっと正気を取り戻した。

別に痛みとかはどうでもいいのだけど、精神疾患を疑われて入院でもさせられると困る。

絆創膏……だとショボいし、包帯でも巻いて、赤いインクでも垂らしておくか。見破られても、まあ笑い話くらいにはなるでしょう。

明日が、少し楽しみだ。

上手いこと袖で包帯が隠れるようにして、いつもどおり仕事をする。アヤベが差し入れてくれたお昼のおかげでやる気も出てきた。

さて、どのタイミングで手首を見せようか。なんて悩んでいた所に、アヤベの方から指摘が入った。都合のいい事に、食事中に自然と見えていたらしい。ありがとうアヤベ。

リストカットした！　なんて言つても……いや、それはそれで良い反応をしてくれそうだけど。とりあえず誤魔化しておく。

……反応が薄いあたり、少し失敗だったかもしれない。まあ実際こんなものか？  
アヤベも出ていつたし、もう包帯は外そつか、それとも一日ぐらい粘つてみるか。なんて考えながら仕事をしているうちに、出ていつたアヤベが帰ってきた……早くない？

話題が戻ってきたから、内心で外さなくて良かつたとほくそ笑む。沈んだ表情と萎れた耳に、若干の罪悪感と仄暗い興奮を覚える。

見たいものは見れたらし、もうネタばらしてもいいのだけれど……いや、やっぱ駄目だな。普通に怒られて殴られる気がする。適当に誤魔化して――

その時、脳に電流が走った。

包帯を見せただけでこの顔だ。ここで止めるのはあまりにも勿体無いというもの。あと一日ぐらいは引っ張ろう。カレーミたいにコクが出るかもしれないし。明日、もつと仕込んでこよう。一日かけて準備して、極上の栄養を摂取したい。一、二発ぐらい殴られるのは我慢するものとする。

特殊メイクをするのは学生の頃以来だ。切り傷とか、そういうグロテスクなメイク。ハロウインの頃くらいしか需要は無かつたけど。

顔……目の周りに作つて、思つたより上手くいつた事に調子に乗つて数を増やす。お腹とか、脚とか、その辺にも。

かなりの時間をかけて終わらせて、今の時刻を確かめるために携帯を見ると、大量の通知が来ていた。夢中になつてている間、携帯が着信を知らせていたことにも気づかなかつたらしい。

返信を求めるメツセージと、三十分おきにかかつてきている着信履歴にかなりの罪悪感。慌てて電話……はこの時間には迷惑だから、メツセージを送ろうとして、天啓が舞い降りた。

この状況。つまり、携帯を見なかつたことも利用しよう。このまま放置して明日会え

ば、携帯を見れないような何かがあつたと思つてくれるはず。今までこまめに返信してきた信頼があるはず。

痣なら派手に転んだとか、殴られたとか。そんな設定が良いだろう。

転んで怪我して連絡できなかつた……いや、誰かに殴られた……うん、こつちだ。

アヤベからのメツセージに反応しないのは罪悪感というのか、とにかくやりたくないことではあるのだけれど、見れるであろう曇り顔を想像すればなんのその。全く曇つてくれなかつたら一人で寂しく泣く。多分立ち直れない。

ともかく、明日が楽しみだ。

結論から言えば、成功しすぎるほどに上手く行つた。私が作つた……いや、描いた？痣を見るたびにどんどん耳をしおらせて、強張つていく彼女の顔はもはや芸術品だ。額縁にでも入れて飾つておきたい。正直濡れる。

警察沙汰になりそうになつた時は流石に焦つたけれど、『お願い』すれば断れないのも想像通り。クズだという自覚はある。まあ誰に後ろ指を刺されようと知つたことではないが。

最高の顔から最高の栄養素を摂れた事に満足して、さてどうやつてネタばらしをするかと思い悩む。ペラペラと回る口のおかげでなんとかなつてているけれど、どんどん話が

凄いところに向かつて いる気がする。

アヤベの本音が聞けるのは嬉しい。好意を持たれて いるのも。だがそれを聞けた理由がこれというは……ちょっと賢者タイムかもしない。罪悪感がとても強い。

五、六発ぐらい殴られる覚悟を決めて、ネタばらしをする。

予想に反して、怒られはしなかつた。代わりに胸に飛び込んできて泣かれるという最高のご褒美を貰つた。こんな幸せになつていいのか？

アヤベが落ち着くまで少し待つて。泣き腫らして赤くなつた目も可愛いな、なんて思ひながら一先ず平謝り。

何でもする、という私の言葉への返答は可愛らしいものばかり。もう少し欲望を出してもらつてもいいのだけど。それとも対して期待されてないだけ？

そんな不安は、アヤベの最後のお願いで消え去つた。

一緒に居たい、そう言つてくれるなんて。昔のアヤベを知つている身としては感動すら覚える。

他人との繋がりを拒絶して、独りでいようとしていた彼女。そんな彼女の口から、他人との繋がりを望む言葉が聞けるなんて。

だから、私の返答も本音だ。これからもよろしく、アドマイヤベガ。

こんなくだらない悪戯をきっかけにこんな事を言うのは、少し申し訳ないけど。

# ゴールドシップ

初めてお前を見たとき、すげーヒマそうなヤツがいるなって思つたんだ。

毎年トレセン学園に新入生がやつてくるように、新人トレーナーも毎年やつてくる。初々しいウマ娘達と同じように彼ら彼女らもまた、これから未来に思いを馳せ、夢と希望を胸に抱いている。

その想いが報われるのか、はたまた現実の前に押し潰されるのか。それは誰にも分からぬが、兎も角現実を知らないが故の明るさが新人トレーナーの持ち味だ。

キラキラとした新人トレーナーの群れを眺めていると、一人その輪の中から外れた、荒んだ雰囲気を漂わせた女性の存在に気づく。

それだけなら夢破れ現実を知ったトレーナーかとも思うのだが、生憎脳内のトレーナーのリストを検索しても該当する顔は無い。

なんだか、無性に腹が立つた。新人なら新人らしく、もつと楽しそうにしていればいいのに。アタシがいるこの学園であんな湿気た面されてちゃたまらない——話しかけようと思つたのは、彼女を自分のトレーナーにしようと思つたのは。そんな理由。

「なあ、そこのお前！　この辺で緑色の皮膚の牙が生えた奴見なかつたか！？」

「……は？」

「なんだよーノリ悪いな。トレーナー探してんだよ。見なかつた？」

「そんな化け物は見たこと無いけど……え？　あなたのトレーナー、そんなヤバイ存在なの？」

「アタシのじやねーけどな！　まだトレーナー付いてねーから、探してんの！　緑色で牙が生えてて胸にバッジ付けてる奴を！　……お前、胸のそのバッジ……もしかして、トレーナーか！」

「え……うん、まあ。肌は肌色だし牙もないけど、一応」

「よし！　アタシの質問に答えたな？　これでお前とも縁ができた！　行くぞ!!」

「どこに……？　え？　何されるの!?」

「アタシ明日デビュー戦なんだよ、よろしくな！　アタシのトレーナー!!」

　そうやつて無理矢理契約書にサインさせて、無事にアタシはトレーナーを手に入れた。つまんなそうな、世界全てにうんざりしますつて澄まし顔を崩してやるために。なんでだか分かんねーけど、コイツの笑顔が見たいって、そう思つたから。

　それからの三年間。無人島で泳いだり、焼きそば焼いたり、ゲートで腕組みガイナ立ちしてみたり。後はURAファイナルズで優勝してみたり？

つまんなそうな顔してたトレーナーは、少なくとも指導者としてはべらぼうに優秀だつた。彼女の言う通りに練習しているだけで目に見えて成長していくたし、レースの作戦も文句無し。任せておけば、G1だろうが海外レースだろうが望むままにできるんじゃないかつてぐらいに。

ただ、そんなものはお互いに望んじやいなかつた。アタシは指示に従つているだけなんて退屈なことに耐えられなかつたし、トレーナーは勝ちの決まつたレースに価値なんて見出していなかつた。

アタシが勝つても大して嬉しそうな顔をしないくせに（腹が立つてドロップキックしたのはほんの少しだけ反省している。少しだけ）アタシの趣味に巻き込むと、いい顔で笑うんだ。ああ、あとゲートで仁王立ちた時もゲラゲラ笑つてたつけ。あれはむしろアタシの方が呆気にとられた。思わずそこから眞面目に走り出してしまくらには驚いた。

三年間。お互に楽しんでいた。

そう思つていたのはアタシだけだつたのかな。

硬かつた表情も、日々を過ごしているうちに柔らかくなつてきて。なんの趣味も無いとかいいながらアタシの遊びには付き合つてくれて。ここまで付き合つてくれるのな

んてトレーナーだけだつたのに。

アンタ、あんなに笑つてたじやんか。それとも、最初から最後まで全部嘘だつたのか  
？

ついさつきまで、トレーナーと電話で話していた。

こんな夜中に、しかも向こうから電話をかけてくるなんて珍しいこともあるものだ。  
そんな事を思いつつも、かかつてきただ電話が嬉しくて、思わず尻尾を揺らしながら電話  
に出た。

「どうした、トレーナー。草木も眠る丑三つ時だぜ？」まあゴルシちゃんはウマ娘だか  
ら起きてたけど！ そんなにアタシが恋しくなった？」  
「うん、声が聞きたくなっちゃって」

この時点では、嫌な予感はしていた。アンタ、そんな素直なタイプじゃないしな。そも  
そも深夜に緊急の用事でもなく電話してくるほど非常識な人間でもない。

そこからトレーナーが語り始めたのは『最初の三年間』の思い出話。それは勿論お  
互いにとつて思い出深い話だ。でも、なんで急に？

いや、本当は。心のどこかでは分かっている。ただそんな可能性を考えすらしたくな  
かつただけで。

「……なあ、なんで急に、こんな話したんだ？」

氣まぐれだけど？ なんて答えが返ってきて欲しい。ゴルシにいつも振り回されるから、お返し。とか。それならアタシも、ピツクリしちやつたぜ☆なんて言つて、明日はどうやつて脅かしてやろうかなんて考えられる。

「ん……やつぱり、最期に聞くのはゴルシの声がいいかなつて。一番長い付き合いだし  
ね」

いつもどおりの明日が来る、なんて。なんで無邪気に信じていたのだろう。  
なんだよ、最期つて。そんな素振り見せなかつたじやんか。アタシはそんなに頼りな  
かつたか？ アンタにとつてアタシは、相談する価値もない相手だつたのか？

「今、どこにいるんだ？」

聞いても答えてくれないのではないかとは思つたし、実際言い渋つていた。最期な  
ら、アタシにも顔ぐらい見せてくれよと泣きついて、ようやく位置情報と、『屋上』とい  
う一言を送つてもらえた。

そうして今、夜の街を走つてゐる。着替える手間も惜しんだジャージ姿で、持ち物は  
携帯一つ。

今回だけは出遅れるわけにはいかない。車より速く走れるウマ娘であることに、ずつ  
と走り続けられるスタミナがあることに。心の底から感謝した。

階段を駆け上がつて、ドアを蹴り飛ばして。トレーナーの居る屋上に出た。

「思つたより、早かつたね。ゴルシ」

「レースより本気出しちまつたからな。多分レコード出てたな」

「レースでその八割でいいから出せば、無敗も夢じやないだろうに」

「ゴルシちゃんはそういう事には興味ないからな。乙女だし」

「私も。気が合うね」

なんでもない、他愛のない会話。トレーナーがあと一步後ずさるだけで死ねることを除けば、実にいつもどおりの光景だ。

「なあ。人間つてその高さから落ちると、タ立ちの次の日の道路のカエルみたいになるんだ。危ないから怪我する前にゴルシちゃんの胸に飛び込んでこいつて」

「悪くない誘いだね。でも、ごめん」

「……なんでだよ。アタシと一緒に過ごすのは、そんなに嫌だつたか？　……楽しかつたのは、アタシだけか？」

アタシの言葉に、優しく、嬌く笑つてみせた。

「違うよ。私だつて楽しかつた。……楽しかつたから、このまま終わらせたいんだ」

「なんだよ、それ。意味分かんね——よ……」

別に、大した話じやないんだけどね。と言うトレーナーに、続きを強請る。一分でも一秒でも時間を稼ぐために。可能なら、死を撤回してもらうために。

「……昔から、なんでも出来たんだ。勉強も、運動も。まあウマ娘には勝てなかつたけど。だから、かな。生きてることが退屈で仕方なかつた。趣味も、大体のことは一度やれば覚えたし、楽しいとも思えなかつた。人間関係だつて私にとつては、相手が望む言葉を望むタイミングで言うだけの作業だつた。……そういうゲームあるよね。アレとおんなじ。好感度を調整して、相性のいい人が固まるように誘導して。好かれすぎず、嫌われすぎず。駒にしか見えなかつたよ」

トレーナーの過去を聞くのは、初めてだ。彼女はあまり語りたがらなかつたし、なんとなく触れない方がいいだろうと、そんなものが気にならなくなるぐらい、今を楽しませてやればいいと思つていたから。

「トレーナーになろうつて思つたのも、大して理由があるわけじやないんだ。ただ難しつて言われてたから。挑みがいがあるんじやないかつて思つて。……今思うと、失敗したかつたんだろうね。成功は誰もが望む物だけど、それしかないんじや意味がないもの」

アタシが人生を“楽しむ”ことに全てを賭けているのなら。きつとトレーナーはその“楽しみ”を探すために全てを賭けていたのだろう。人生に絶望して、それでもと次の輝きに手を伸ばして。手が届いた瞬間にゴミになる。傍から見れば成功しか無い人生なのに、その実挫折と失望で満たされている。なんとも皮肉なことだ。

「トレーナーになつても、変わらなかつた。ウマ娘を見ると、なんとなくその子の事が分かつた。……さつきの例えで言うなら、ステータスかな。何が向いてて、何をさせたらいいか。正直、理解に苦しんだよ。勝ちたいって言うなら、もつと効率良くやればいいのについて」

傲慢と言つていいそんな言葉。言つたのが他の人間なら鼻で笑つておしまいだつた。ただ、彼女の指導の上手さは身を持つて知つていたから。きつと真実なのだろうと納得できた。

ああ。だからアンタはあんなまんなそうな顔してたんだな。

きつとアンタからしたら普通に生きてきただけだつた。でも、誰もその普通に付いてこれなかつた。アタシも含めて誰一人、普通を理解してやれなかつた。

そりや、アタシを含めて、周りの人間全員。頼りないよな。

心の内を話す価値の有る人間なんて、誰一人見つけられなかつたんだ。

「……でもね。貴女と会つてからは、楽しかつたよ。これは本当に」

少しだけ、笑顔。あいも変わらず、消えてしまいそうな。

「私のためにしてくれた、なんて思うほど思い上がるがつてはないけど。貴女のすることとは本当に意味がわからなくて、予想もできなくて。驚かされて、笑わされてばかりだつた。ずっと一緒に居たいって思つたよ」

「……だつたら。そうしてくれよ。これからもずっと、退屈なんてさせないから。想像を超えるのなんて、ゴルシちゃんならお手の物だつて、知つてんだろ？」

「知つてるよ。私がここで頷いたら、きっと本当にそうしてくれるんだつて信じてる。私なんかじや思いもしないような方法で」

「なら——」

「だから、かな。人は、慣れる生き物だからさ。……私が一番怖いのはね。今こうやつて樂しいつて思えてる時間が、楽しく思えなくなること。どんどん色褪せて、昔は良かつたなつて思い出す。そうなるくらいなら、今樂しいうちに終わらせたほうがいい。……私は、未来が今より良くなるなんて信じられない」

だから、ここで終わらせるんだ。そんな言葉で、話が終わる。そのまま飛び降りようとするから、待つてくれとほんの僅かな猶予をもらう。

最後に……いや、最後にしないための一言。何を言えばいい？

死なないで。置いていかないで。生きていて欲しい。どれも本音だが、足りない。  
考えろ。なにか一言。思い留まらせる、何かを——

「トレーナーが死んだら、ゴルシちゃんも死ぬ！」

思いついたのはそんな一言。自分自身を人質にする、追い詰められた逃亡犯のようなもの。

「どうせ、『私のことは忘れてね』とか言うつもりだつたんだろうけど、無理だから！アタシを殺す気か！」

死ぬ覚悟と殺す覚悟は別のものだ。彼女自身の命に興味が無くとも、アタシの事を本当に大事に思つてくれているのなら、これで思いとどまつてくれるのではないか——いや、こんなのは後付けの理屈だ。漏れ出たこれは、アタシの本音に違いない。

「……それは。それだけは、嫌だなあ……」

結論。功を奏した。ゆっくりとアタシの方に歩いてきて、抱き着いて……いや、しがみついてきた。

そこでようやく、彼女の身体が震えている事に気がついた。怖くなつたのだといい。それならもうこんな事はしないでくれるだろうから。

「かつこ悪いなあ、私。ただのお騒がせ構つてちやんじやん」

「そう思うなら、もう二度とやるなよな。アタシの予定は百年先まで、アンタと一緒に居るつて決まつてんだから」

「……じゃあ、百年先まで楽しませてね？」

「あつたりまえよ。アタシはゴールドシップ様だからな。黄金のような人生を体験させてやるよ」

「あんまり派手なのも困るかな……？」

すげーヒマ そうなヤツがいるなって思つたんだ。アタシと出会つて、少しは面白くなつたかな。これからも楽しんでくれるかな。  
アンタが死にたいつて思つてる気持ちを。忘れられるくらい楽しませてみせるからさ。

あと百年、一緒に居よう。



私の担当ウマ娘はゴールドシップだ。

これを言うと誰も彼もが、ドン引きという言葉が相応しい表情を浮かべるのだけれど、私としてはかなり不服である。

強くて、美人で、何より面白いウマ娘。これ以上に契約したくなる相手がいるだろうか。

ゴルシが居なければ無人島になんて行く機会は訪れなかつただろうし、宝探しもコスプレ大会も至高の焼きそば作りもする事は無かつただろう。

諸事情あつてトレセン学園に来るまではかなり人生に飽きていた私だが、今では人生満喫している。

最近面白かったのは……やはり宝塚記念か？ 百二十億程の金が裏でゴールドシップに賭けられ（勿論非合法だ。URAはレースでのギャンブルを認めていない）絶対に勝たせろと脅された時の事。

レース前の控え室で二人きりになつたゴルシに一言。

「マックイーンちゃんつて、お嬢様らしく高い下着付けてるのかな。あの性格だし、子供っぽいパンツだつたりするのかな」

それを聞いたゴルシは見事な百面相をしてみせて、ブツブツと考え事をしながらゲートへと向かつていつた。

結果、見事な仁王立ち。ゲートが開いた事に気付かず立つたままの彼女と、それを見て泡を噴いている気取つたカツコ付けた服のおっさん共に腹が捩れるほど笑わせてもらつた。

その後色々あつたけど、まあナイフを持つた人間程度なら大して問題にもならない。こちとらウマ娘に勝つべく身体を鍛えているのだ。

そんなふうに、ゴルシのおかげで人生をエンジョイしていたのだけれど。ある日ふと気がついてしまつた。

ゴルシは、いつも笑顔を浮かべている。……本当に悲しんだ時はどんな顔をするのだろう。真剣な時は？ 怒っている時は？

一度気になつてしまえば、それを見るべく実行に移すまでにさほど時間はかからなかつた。

ネタは私自身で良いだろう。ゴルシも結構私の事を慕つてくれているし。勘違いだつたらトレーナーを辞めて田舎に帰る……いや、帰る場所も無いけど。第二の人生でも考えるとしよう。

夜遅く、電話をかける。365日24時間いつ寝ているのかすら分からぬ相手だし、大丈夫だろ？という読みは見事に的中した。

思わずぶりな言葉と、唐突な過去話。オマケに最期という言葉。賢い、察しのいい相手は楽でいい。居場所を送つて、彼女の到着を待つ。

立ち位置は慎重に調節する。流石に足を滑らせて死ぬのは御免だ。いや、ゴルシの泣き顔を見てからならいいけど。

予想より数段早く到着した彼女。初めて見る真剣な顔に、思わず胸がときめく。これが……恋？ なんて。とつくに惚れてるけど。

つらつらと、それっぽい言葉を並べていく。一応語った言葉に嘘は無いから、説得力

はあるはず。ただ全てゴルシへの恋心で既に解決した問題だというだけだ。

私の言葉にどんどん顔を曇らせて、今にも泣き出しそうになつたゴルシに、たまらなく興奮を覚える。

いつそ、本当に飛び降りようか。どんな顔をしてくれるだろう。どんな声を？ 私は傷になれるだろうか。

そんな邪な考えは、ゴルシの一言で消え去つた。私が死ぬのはどうでもいいが、ゴルシが死ぬのは駄目だ。好きな人が死んで喜べるほどのクズではない。私はまだ人の心を捨てては……いるかもしれないが、兎に角駄目だ。

ゴルシが居なくなる。考えただけで、身体が震える。思わず彼女の方へと歩いて繋り付く。

色々あつたが、見たいものは見れたし終わりで良いだろう。充分に満足のいく結果だ。

後はいつも通りの日常に戻るだけ……と、思つていたのだけど。

「目え覚めたか？ 納豆にする？ くさやにする？ それともド・リ・ア・ン？」

「おはようゴルシ。……なんで居るの？」

朝日を覚ますと、ゴールドシップが私の顔を覗き込んでいた。朝からとんでもない美

人を見せられて心臓が止まつたらどうするんだ。自分の美人を自覚してくれ……いや、自覺してやつているのか。

「おいおい、一緒に居るつて言つただろ！ 男として一度言つたことは守らねえとな！」  
「いや女の子じやん……ゴルシなら別にどつちでも好きだけどさ」

「んまつ！ 照れちゃいますわ！」

「……とりあえず、ご飯食べていい？」

白米、味噌汁、焼き鮭。朝ごはんで検索したら出てきそうな朝食。いつの間に作つていたのだろうか。それが二人分。

そして美味しいのが妙に悔しい。私も料理は出来る方のはずなのだけれど、どうにも敵わない。

二人でご飯を食べて、洗い物を済ませて一息つく……前に、質問を繰り返す。なん定居るの？

さつき答えただろ！ と誤魔化そうと……いや、案外本当にあれが理由か？ ゴルシは未だに読み切れない。それが楽しいのだけれど。

「……目離したら、死んでそうで怖かつたんだよ」

考えているうちに、向こうからポツリと零した。

どうにも、少しばかり過保護になつてしまつたらしい。

監視付きの生活。まあ好きな人からならそんなに嫌でもないけど、外泊申請やら外出申請やら負担だろう。誤魔化すにしても、眞面目に出すにしても。

「……一緒に住む？」

一人暮らししてゐるウマ娘も居るし、多分出来るよね？」

「そうだな。毎回トンネル掘るのも面倒だし。あとで合鍵渡すな？」

「……ゴルシならほんとにウチの持つてそうだね」

恋愛は、告白したら負けだとか、愛された方の勝ちだとか。色々言われている。  
果たして私たちの場合、どちらが勝つてゐるのだろうか。お互い結構ズブズブな気は  
しているのだけれど。

よく分からぬ。けど一つだけ分かることがある。

きっと、私の人生は。黄金に彩られた、面白おかしいものになるだろう。

# アグネスタキオン

ウマ娘の限界の果てが見たかった。

始まりはそんな気持ちで、それは今でも変わつてはいない。全てをなげうつても辿り着きたい場所。有り触れた言葉で言うなら、それを見るのが夢だった。

その為ならどうなつてもいい。例え自分の脚が壊れようと。果てに到達するのが自分ではなかろうと。そんな思いで、破滅的な人生を送つていた。

そんな刹那的な考えを変えたのは、一人の女性との出会い。同じ夢を見た、同士とも言える相手。狂気を目に宿した、私の同類。

一つだけ違つていたのは、果てへと辿り着いて欲しい相手が決まつていたことか。

私は、自分の脚が他人より脆いことを知つていた。三年どころか、最初の一年で壊れかねないくらいに。だから自分自身に研究サンプル程度の重きしか置かず、データ収集にでも使おうと、そう思つていたのだが。

タキオン、タキオン、とどんな扱いにもめげずに着いてくる彼女に、絆されてしまつたのだろうか。

気づけば予定を変えて、自らの身体で辿り着こうと。そう考えるようになつっていた。

『感情』というものが身体に与える影響について、些か過小評価していたのかもしれない。彼女の思いに当てられて、騙し騙しながらも自分の身体で夢を追う覚悟を決めた。果たして、狂気に当てられたのはどちらだつたのか。

「モルモット君。何か欲しいものでもないかい？」

「どうしたの急に」

研究室……代わりにしている空き教室。いつも通りの実験中、ふと傍らにいる担当トレーナーにそんな話題を振つてみる。

「いやね？ 君の献身的な協力によつて研究を進めているわけなんだが、思えばその協力に報いた事が無かつたなと思つてね。モチベーションを保つてもらう為には飴も必要だろう？ ……いや、まあ、気紛れではあるんだが」

「ええ……急に言われてもな……タキオンと一緒にこうしてただけで、割と満足なんだけど」

なんともまあ、欲の無い事だ。適度のガス抜きは爆発しない為にも必要だと思うのだがね。……というか、かなり恥ずかしい事を言つて自覺はあるのだろうか。

「君はどうにも遠慮がちだからね。ま、暇なときにでも考えておいてくれたまえ。気が変わつていなかつたら、できる限りは叶えよう」

「ん。思いついたら言うよ。……それで、今日は何をしたらいの？」

「そうだねえ……とりあえず、紅茶でも淹れてもらおうか。砂糖も忘れず頼むよ」  
はいはいと、手慣れた様子で準備をしている。今日は特に飲んでもらいたい薬もないことだし、少しゆつくりしていてもらおうか。

正直に言つて、少しばかり研究は行き詰まっている。だからこそモルモット君に他愛無い話題を振つたわけだが。

……行き詰まつた状態で、ただそのまま頭を悩ませていても仕方ない。インスピレー  
ションはふと他のことをしている時などに降りてくるものだ。

モルモット君の紅茶を飲んで、糖分が頭に行き渡つたからか一つの考えが浮かんでき  
た。本懐たる果てのための研究ではなく、趣味のような物だが。息抜きには丁度いいだ  
ろう。

「よし、決めたよモルモット君。今日は解散だ」

別に作つてあるところを見られても、彼女にそれがなんなのか理解できるとは思えな  
いが。こういうのはシチュエーションが大事だ。サプライズを演出させてもらうとし  
よう。

「じゃあ晩ごはんだけ作つとくね。どうせ徹夜……かは分かんないけど、食事は抜きそ  
うだし」

「助かるよ」

とりあえず必要な薬品のストックを調べるとしよう。——とか——とか。さあ、楽し  
くなつてきた。

「やあモルモット君。いい朝だね」

「おはようタキオン。その顔だと寝てなさそうだけど……」

「なに、いつものことさ。それはさておき、早速この薬を飲んでくれたまえ」

彼女は差し出された薬品を、一切の躊躇いを見せずに一息に飲み干す。この調子だと、毒を差し出しても飲み干すだろう。無論、害のあるような物を飲ませたりはしないが。

「……光らないね？ 今日は、なんの薬？」

「別に普段だつて光らせようと思つてゐるわけでは無いよ？ ……今回飲ませたのは中枢抑制作用による大脳皮質の麻痺をもたらす薬さ。少し眠くなるかもしけないが、それは正常な反応だから抗わなくていい」

「え……と、睡眠薬つてこと？ 前も作つてなかつたつけ」

「今回の薬の主作用はそこでは無いのさ。簡単に説明すると、うーん、そうだな。嘘が吐けなくなる薬、といったところかな？」

薬のせいか、少しばかり彼女の目がとろんとしてきた気がする。理解しているのかしていないのか。まあどちらでもいいことだ。

「さて、それでは聞かせてもらおうかモルモット君。欲しいものでも、して欲しいことも、したいことでも構わない。君の本当の望みを言つて『らん?』

「わたしの、したいこと?」

「うん。こうでもしないと、何もないとしか言つてくれないだろうしね」

「わたし——私を——して」

聞き間違いかと思った。今回飲ませたのは、身近な現象で言えばアルコールに酔つたのと同じ状態になる薬だ。なのに、そんな事を言うなんて、ありえない。

聞こえなかつたから、もう一度。そう促せば、同じ言葉を繰り返した。

「タキオン、今すぐ私を殺して

「も、モルモット君、何を……」

「お願ひ。早く。絞めても、折つても、なんでもいいから」

「待て、待つてくれ。意味が、わからぬい……」

焦燥に満ちた顔で、狂つた願望を口にする彼女の姿が、受け入れられない。

「おねがい、早く……死なないと。殺してくれないなら——」

ふらり、と立ち上がりつて。ゆらりゆらりと窓の方へ。何歩か歩いたところで、呆気に

とられている場合ではないと、力づくで引き止めるのが間に合つた。

「離して！　お願ひ……死なないと、私は！　わたし——」

「……これを、飲むといい。すぐに、意識がなくなるから」

ひつたくるように、差し出した薬が奪われる。以前作った睡眠薬だ。代償にキツイ悪夢を見ることになるだろうが……いつそ、今の一連の出来事も夢だと思つてくれればいい。

我ながら、即効性のあるいい薬だ。これで、少なくとも目覚めるまでは自殺衝動に襲われることもないだろう。

こんなことになるとは思わなかつた、などというのは余りにも無責任な言い訳だろうか。……科学者の端くれとして、予想できなかつたなどというのは無能の証明にしかならないが、それでも、あんなものが予想できるはずもない。

ずっと、抱えていたのだろうか。

飲ませた薬に、希死念慮を誘発するような作用が無いことは自分の身体で確認済みだ。つまりアレは、正しく薬が作用した結果の、彼女が隠していた願望の発露。

原因は、一体何だ？　すべての物事には因果が有るはず。何もなく死にたいと思うような人間が居てたまるものか。

彼女の口から、悩みを聞いたことはない。最も、何か抱えていたとしても素直に口に

するタイプでもないが。

自殺の理由。そんなものは十人いれば十通りあるような、画一的な答えがあるようなものでは無いだろうが。それでも無理矢理推察するなら……定番なのは、金銭問題や人間関係か？

中央のトレーナーというものは、高給取りだ。金銭的に困窮するというのは考えにくい。彼女自身、お金があつても使う時間がないと笑っていた。家族の借金などの可能性も無くはないが……いや、それなら金があつても時間がないなんて表現はしないだろう。

人間関係……あいにく、これは私の苦手な分野だ。誰かとトラブルを起こした、なんて話は聞かないが、分かるのはその程度。彼女の友人関係も、家族関係も、私は知らない。

健康問題。彼女に身体的疾患が無いことは知っている。精神的疾患は……少なくとも、聞いた時には無いと言つていた。

こんな形で、今まで対人関係を疎かにしていたツケがくるとは思わなかつた。私の乏しい経験では、彼女がここまで追い詰められた原因を推測することすら出来はしない。私が思い悩んでいることも知らずに、呑気……と言うには少し苦しそうな顔をしているが、眠つている。

悪夢も、相当酷いものを見ていたりするのだろうか。君が見ている夢は、どんなものなのだろう。君にとつて、最悪な事とはなんだい？

思えば、私は彼女のことをあまり知らない。尽くしてもらうのが当たり前になつていつから。彼女の好きな食べ物とか、趣味とか。そういう事を全然知らない。

死のうとしている理由がわからないのも当然だ。そんなものが分かるほど、彼女のことを知らないのだから。

本当に。何をしていたのだろうね、私は。

モル……いや、トレーナー君の頭を自分の膝に移して。そんな事を思う。

少しだけ表情が柔らかくなつたような気がするのは、私の希望が見せる幻覚だろうか。

起きたら、彼女ともつと色々な話をしよう。私達は同じ目標を持つてしまつたせいで、他のことに目を向けてこなかつた。何もかも、最短が最善というわけでもないだろう。

「……早く、目を覚ましてくれよ。トレーナー君。私達に欠けているものが分かつたんだ。君の協力無しでは、埋められそうもない」

彼女の髪を梳きながら誰にも聞こえない、聞こえて欲しいひとり言をこぼす。

ああ。私は感情というものを、実に過小評価していた。ここまで心を乱されて、何も

できなくなるなんて。

彼女が『殺して』と言った時の絶望は、言葉で言い表せるようなものでは無かつたし、もう二度と味わいたくない。

果てへと辿り着く。その夢は一人で見たはずだったのに。いつの間にか二人のものになつていて。気づけば彼女が傍らに居ないことなんて考えられなくなつていた。

「大体、君が居なくなつたら誰が私の面倒を見るんだ」

こつちの気も知らずにすやすやと眠つている。少しだけ腹が立つて——どうしようもなく、愛おしく思えた。

全く。私がここまで変えられてしまつているなんて思いもしなかつた。感情というのは実に手に負えないもので、恋心というのは更に厄介なものだ。実際に容易く人を変えてしまう。

ただ、まあ。悪い気はしない。

「好きだよ、モルモット君」

敢えて、口に出してみる。なんだか心臓の鼓動が早くなつて、顔が熱くなつて——ああ、こんなのは私のキャラじゃない……！

「……全部、君が悪いんだ」

どうせ寝ているのだから、何をしたつてわかりはしない。

こつそりと、彼女の唇に自分の唇を近づけて。  
その距離を、ゼロにした。



アグネスタキオンは問題児だと、誰もが言っている。まあそれは私にも一切否定できないのだけれど。だからといって、アグネスタキオンを担当する気がしれないという言葉には反論させてもらいたい。

まず、実力はトップクラスだ。神話とまで讚えられたその脚は、決して過大評価ではない。生半可なウマ娘なら相手にもならない。

そして何より、顔がいい。特に目だ。あの何もかもを切り捨てて、夢だけを狂気的に追う瞳。一目見て恋に落ちた。余分なものを切り捨て、残ったものこそが真に美しい。

ここからは、他人には絶対に言えないが。あのスタイルもとても……凄く、良い。私の……オブラーートに包んで言うとスレンダーな体型とは違って、実に女性らしい、メリハリのある身体をしている。本人がそれに大して価値を感じていないのも良い。一度

でいいからあの胸に顔を埋めてみたいものだ。住民票をタキオンの谷間に移しておくべきか？

研究に夢中になつて、シャワーを浴び忘れていた時の匂いが好きだ。換気もせずに少し匂いがこもつたあの部屋の、薬品と汗の匂いのする彼女が好きだ。流石に恥ずかしがつて近寄らせてくれなかつたけど、遠くから堪能させてもらつた。

私は生活の大半を依存するだらしのなさが好きだ。私が作つた食事で、私が用意した飲み物で。彼女の身体が構成されているというのは實に興奮する。そのうち着替えや入浴まで私に依存してくれないだろうか。全てを私に任せて欲しい。

……ただ私が変態を晒しただけになつてしまつたが、兎も角。私にとつてタキオンと過ごす時間は何物にも代え難くて、これ以上望むものなどなにもないので。……嘘。やつぱり胸は揉みたいしイチャイチャもしたい。膝枕とかして欲しいしお腹に顔埋めたい。

そんなわけで、タキオンから何か欲しいものでも、と聞かれたときにはタキオンが欲しいと即答しそうになつた。流石に自重したけど。こういう時私の死んだ表情筋は便利だ。

一緒に居るだけで満足というのは私の本音だ。最高の美少女と同じ空間に居られる

こと以上の幸せなど早々ないだろう。

だからまあ、それで話は終わつたと、油断してしまつた。

翌日。私にとつてのいつもの日常。つまりはタキオンの作つた薬を飲むモルモットとしての仕事がやつてきた。昨日飲まなかつた分二倍飲まされたりするのかとも思ったけど、そんなことは無いらしい。

飲み干してから、そういえばいつもはどんな薬だか飲む前に教えてくれるのに、今は無かつたなと思つて尋ねてみる。

今回の薬の効果を聞いて——その瞬間、血の気が引いた。

要は、自白剤。つまり、私のタキオンへの薄汚い欲望が知られる。

駄目だ。嫌だ。絶対に知られたくない。嫌われたくない。

どうすればいい？ 私自身の口を封じる方法。何も喋れなくなればいい……ああ、簡単なことだ。

「私を殺して。タキオン」

好きな人に殺される。それは紛れもなく私の『して欲しいこと』だ。

そこからは……薬の作用か、よく覚えていない。

次に意識を取り戻した時。何か柔らかいものの上に乗つてゐるなどぼんやり認識し

た。

「大体、君が居なくなつたら誰が私の面倒を見るんだ」

タキオンの声がする。しかも、かなり近くから。思わず、開いたばかりの目を閉じた。

「好きだよ、モルモット君」

……起きたと思ったが、これも夢の中らしい。随分と私に都合のいい夢だ。とりあえずこの言葉を起きてからも思い出せるよう魂に刻み込まないと。

「……全部、君が悪いんだ」

そんな言葉とともに、私の唇に柔らかな感触がやつてきて。

もう一度、気を失つた。

どこまでが夢で、どこまでが現実だったのだろう。

随分と長く人の膝を占領していたねえ、そう文句が飛んできた以上膝枕されていたのは現実。じゃああの言葉と……キスは?

流石に直接尋ねるわけにもいかない。

「それで、体調は大丈夫かい? 悪夢ぐらいは見たかもしねないが……」

「うーん……大丈夫、かな? あと、その……」

それと、もつと重要なことが一つ。

「記憶が曖昧なんだけど、私薬飲んで変なことしなかった？ 変なこと口走つたりとか……」

「……何も、無かつたよ。あの薬は失敗作だ」

「あ、そうだつたんだ。眠くなるだけだつたしねえ」

「なにかしてたら……というか、私の欲望が漏れてたらこんな風に口を利いてはもらえないだろう。いまいちよく覚えていないが、薬を飲んで何か言う前に寝てしまつた、ということだろうか。

「うん。だから、今日の研究は中止だ。……ということで、モルモット君。食事にでも行かないかい？」

中止かあ。それなら時間も空くし、確かに食事にでも……食事？

「え？ タキオンが食事に行きたがるなんて……まだ夢？」

「失礼だな君は……結局ご褒美が渡せなかつたからね。良いところでも紹介してあげようと思つたんだが。まあ君が行きたくないなら無理強いはしな——」

「行く行く。デートしようよデート。心拍数とか測つとくから」

「……いや、今回はそういう事はしなくていい」

あのタキオンが？ 明日は槍でも降るのだろうか。

「ゆつくりと、話をしよう。思えば私は、モルモット君の好みすら知らないからね」

好みはタキオンだけど……？　あ、食事の話か。

「あー……そ、ういえばそういう話、したことなかつたつけ」

「そうだとも。お互い、これからも一緒に居るんだ。そのぐらい知つておいてもいいだろう？」

私のことを知ることに意味があるのかは分からぬけど。そんなことより、これからも一緒に居ると、当たり前のように言つてくれたことが嬉しかつた。

好きだよ。タキオン。

これからも、一緒にいよう。トレーナーでも、モルモットでもなんでもいい。

貴女になら、殺されることすら喜びだ。

# シンボリルドルフ

レースに絶対はないが、そのウマ娘には絶対がある。世界に届くウマ娘、シンボリルドルフ。

不敗の皇帝と呼ばれるようになつて、数年経つた。三冠を達成し、クラシック級を無敗のまま駆け抜けた。

シニア級でも勝ちを重ねて——流石に、限界が来た。

レースは。脚が速ければ、作戦を立てれば勝てるというほど単純なものではない。周りのウマ娘との噛み合わせ、その日のコンディション、バ場状態に天気や風速などの気候。様々な条件が重なり合つて作り上げられている。

今まで勝ち続けたことに実力が関係無い、などとは言わないが、運が良かつたというのも多分にある。

勝負は水物だ。勝つこともあれば、当然負けることもある。それがたまたま今回だけ。無論悔しさはあるし、次は負けたくないという思いもある。だが、逆に言えばそれだけだ。

負けても良い、などと思つたことは無い。常に勝利を求めている。だが、一度の敗戦

で折れるほど軟弱な心は持ち合わせていない。

負けたのならば、更に自己を磨き上げ。実力で叩き伏せるだけだ。

敗北しようと、私は変わらない。いつもどおりのトレーニングの日々に戻り、捲土重来。雪辱を果たしてみせよう。

……何も知らない私は、そんな風に考えていた。

『期待』を裏切られた人間の醜さを、知らなかつた。

初めての敗北は、予想していたよりも大々的に報道されていた。私に勝つたウマ娘は、まるで魔王を討ち取った勇者のような扱いで、皇帝の凋落だと書き連ねられている。先輩三冠ウマ娘に勝ったときから薄々思っていたが、どうも私にはそういう意味での人気というものが欠けていた。彼女は走り方の与える印象の違いなどと言つていたが、どうなのだろうか。

……気にして、詮無きこと。まあ少しばかり面白くないという思いもあるが、結局の所、勝てば良いのだ。それだけでまた掌を返すだろう。

そんなことを思つて、報道への興味を無くした。この時。もっと、それこそ隅々まで記事を読んでいれば。

もつと早く気づいていれば、打てる手もあつただろうに。

良くも悪くも、私の敗戦は話題になつた。大手から個人まで、取材の申込みがひつきりなしに来るくらいには。それは私宛だつたり、トレーナー君宛だつたりするが、日常に支障をきたしかねないそれに、流石に学園から調整が入つた。教育機関として、一生徒にそこまでの負担はかけられないと。

懇意にしている記者やある程度信頼の置ける大手。それらからの取材だけを受け、残りは……悪く言えば、黙殺。全ての相手に言葉を届けるのが理想ではあるのだろうが、現実問題としてそれは難しい。ままならないものだ。

メディアにも種類がある。ただ淡々と事実を述べていくもの、事実を基に自社の考えを述べていくもの。都合のいい事実だけを切り取つて大衆を扇動していくもの。事実など関係なく、ただ目を引く言葉を並べ立てるもの。

ネットワークの発達により総発信社会となつてゐる現代。見られるためにより過激になつていく人間は少なくない。そして受け取る側も、正しさより面白さを優先する。どうせ、他人になどそこまで興味はないのだ。過激な言葉が、エンターテイメントとして消費されている。

……ここからは、後になつて知つた話だ。

私の『ファン』を名乗る人物が、SNSに書き込んだ。皇帝の敗北は無能なトレーナーのせいであると。まともなトレーニングメニューも組めず、適切な指示も下せない無能

だと。

単なる愚痴のようなもの——それでも許し難いが——だつたそれは、恐らくは本人が思つていたよりも拡散された。

人は、信じたいものだけを信じる。

皇帝の強さを信じていた者にとつて、分かりやすい悪役は実に便利で、殴りやすいモノだつたのだろう。

一人の愚痴は、すぐにネットの記事になり、あたかも真実のように扱われた。一人の女性を、分かりやすい悪として、正義に酔つて殴りつけた。

そして大衆は、その程度で満足しなかつた。この程度では殴り足りない、燃やし足りないとさらなる疵を求めた。……それが真実かどうかなど、誰も気にしてはいなかつた。

私生活を覗いて。過去を暴こうとして。望んだ醜聞が見つかなければ、『匿名希望の関係者』に有りもしない過去を語らせる。追い詰められるのは、当然のことだ。

ある日、トレーナー君が学園に来なかつた。

無論人間である以上、体調不良を起こすこともあるだろうが、それにしても連絡も無

しで、というのは……彼女の性格からして尋常ではないように思う。

こちらから連絡を入れるべきかと悩んでいたところで、たづなさんから呼び出しが入った。

生徒会業務で学園と調整するような案件が今あつただろうかと少し考え、トレーナーの件と言われ、思考を止めて一も二もなく向かうことになった。

「失礼します、シンボリルドルフです。それで、話とは？」

思っていたよりも自分の中に余裕というものが無かつたようで、そんな单刀直入な、不躾な言葉をぶつけてしまった。

幸い気分を害した様子は無かつたが……なんと言えば良いのだろうか。言葉を選んでいるような、言いあぐねているような、そんな様子が見て取れた。

「ルドルフさんのトレーナーの事なのですが……その、どのくらい知っていますか？ なんと言えばいいのか……世間からの声、というか」

「……私の敗北の原因だとか、そのように言われている程度は。不甲斐無い事です」

私の返答に一度瞑目し、黙つて一冊の本を差し出してきた。

いわゆる、ゴシップ系の週刊誌。『業界の裏話』だと、後は……性と暴力を取り扱つているような三流雑誌。

付箋が挟まれているページを開いて。思わず、取り落しそうになつた。

ただ人を貶めるためだけに書かれた記事を読み進め、なぜ言い濶んでいたのか、今まで耳に入れてこなかつたのかを理解した。大切な人が『淫売』だとか『阿婆擦れ』だとか言われているような物、誰だつて見せてやろうとは思わないだろう。

気がつけば、持っていた雑誌を文字通り真つ二つに千切り裂いていた。

「——申し訳、ありません」

「……いえ、お気になさらず」

「事実無根、としか思えないのですが。……学園として、対応は?」

「お察しの通り、そこに書いてある内容は出鱈目でした。こちらとしても抗議と、謝罪と訂正がなければ法に訴えるとは言つているのですが……」

「どうせ。適当に誤魔化し、引き伸ばしているのでしよう」

正しい方が報われるとは限らない。世界的スターが冤罪で評価を落とし、未だにその冤罪を信じている人が居るように。裁判は時間がかかりすぎ、嘘だと判明する頃には、大衆の興味など他に移っている。相手はその間に作つた醜聞で金儲けというわけだ。

「可能な限り圧力はかけるつもりです。幸い、伝手は沢山有りますから。ただ……」

人の心は壊れやすく、一度亀裂が入れば取り返しがつかない。既に職場に来ることすら危うくなつて、いる彼女は、果たしてどれほど追い詰められていることだろうか。

「誠心誠意、彼女の支えとなりましよう」

皇帝の杖として。ずっと支えてくれた恩に少しでも報いるために。

以前教えてもらったトレーナー君の家。学園内のトレーナー寮に住まないのは何故なのだろうか？ そういえば、聞いたことがなかつた。

やや緊張しつつ、インター ホンを押す。……返事がない。少し待つて、もう一度。返事はなかつたが、ガタゴトと物音が聞こえてきた。

「トレーナー君、聞こえるかい？ 私だが……今、入つても？」

ちよつと待つて一と間延びした声が聞こえてくる。留守、などというオチでなくして良かつた。それに、思つていたより元気そうな声であつたことも。心配をかけたことと、無断欠勤したことに文句を言つてやろう。

やや時間が経つてから、お待たせ、とドアが開いて。風呂上がりだと一目で分かる格好で出てきた。君はまたそんな格好をして、と説教をしようとしたところで。

鉄の匂いと、ぼたりと手首から垂れている赤い液体に気づいた。

「ど、トレーナー君……それ、は

「え？ あー、やっぱ。まだ止まつてなかつたか」

床が汚れるなあ、となんでも無いように言う。その姿が、どうしようもなく壊れて見えた。

「ごめんルドルフ。ちょっと包帯巻いてくるから……上がるて、座つて。お茶ぐらい  
しか出せないけど」

「……私も、手伝おう。自分では巻きにくいだろう」

「そう? 助かるよ」

幸いと言つて良いのか。そこまで深く切つたわけでは無かつたようで。包帯を巻いて、軽く押さえているうちに出血は止まつたようだ。

「もう大丈夫かな? ありがとね。……えつと、それで。なんで来たんだつけ? あ、休んだからか」

「まあ、その通りだ。何があつたんじやないかと心配になつてね。起きていたなら連絡の一つも入れて欲しかつたよ」

「やー、申し訳無い。ちょっとそれどころじやなくつてね」

「それは、何をしていたんだい?」

努めて、優しい声で。追い詰めないように。

「えつと……仕返し?」

「仕返しとは?」

「うーん……なんて言うんだろ。自分達がしたことの結果を思い知らせる、かなあ」

そのために死のうとしたのか? とは流石に聞けなかつた。

仮に。今彼女が死を選んだとして。きっとそれは大した意味を持たないだろう。世間は悪人が一人死んだ程度にしか思わず、すぐに忘れる。名譽回復の機会も失われるだろう。

第一、私が嫌だ。もし、それが最善の手段であつたとしても認められない。

「そんなこと、しないでくれ。私が、私達がなんとかしてみせるから。だから――」

「今まで何も出来なかつたのに?」

私の思いは、そんな一言で切り捨てられた。

「ああ、いや、怒つてるわけじゃないよ? 別に、何が出来る訳でも無かつただろうしね。ただ、なんていうか……ちょっと、疲れちゃつた」

全てを諦めたような、冷めた笑い。トレーナー君のそんな顔を、初めて見た。  
「みんな、『悪い人』には何をしてもいいと思つてゐるからさ。有名人になるのも大変だね。一方的に知られて、憎まれて、後ろ指さされる」

私の知らない世界の話。彼女が独りで耐えてきた世界の話。

「知つて欲しくなかつたんだけどさ。こんな事。ルドルフには、迷わず理想を叶えて欲しかつたから」

全てのウマ娘が、誰もが幸せになれる世界。それを実現すると誓つて、理想を共にするトレーナーとも出会えた。

「私は……暫くは、無理かな。酷い目にあわされて、それでも相手の幸せを願えるほどの聖人じや無いからさ」

本当に。そんなものが理想なのだろうか？ 世の中には、幸せになる価値など無い人間も居るのでは？ —— そんな思考が、思い浮かばなかつたと言えば嘘になる。  
「酷い顔してるよ？ ……だから、知つて欲しくなかつたんだ。ルドルフは、優しいから」

そんな顔をしないでくれ。そんな事を言わないでくれ。そんなに追い詰められるくせに、私のことを気遣わないでくれ。

「……」めんね？ 変な話して。明日はちゃんと行くからさ。誰かに聞かれたら大丈夫そうだつたつて言つといてよ」

そんな言葉で話を終わらせて、立ち上がるうとしたトレーナーを引っ張つて。力づくで抱き締めた。

「ちよ——え、ルドルフ？」

「独りにしたら。今度こそ死ぬ気だろう」

「そんなことは……あー、あるかも」

「嫌だ。君を失つてなるものか。好きな人を死なせるくらいなら、力づくでも私の物にする」

「このまま離したら消えてしまいそうだったから。繋ぎ止めたくて言葉を紡いだ。

「すき……好き!? え、な……え?」

「ずっと、誰よりも近くで支えてくれた相手だ。好意を抱くぐらいおかしくは無いだろう」

「うー……顔熱いんだけど……狡いよルドルフ」

「君が少しでも元気になってくれるなら、ズルでも何でもするさ」

彷徨つていた彼女の腕が、私の背中に回された。

「ルドルフは、あつたかいね」

「まあ、ヒトよりは体温は高いかもしないが……」

「そういうことじやないよ。ねえ、ルドルフ」

「なんだい? トレーナー君」

「好きだよ」

確かにこれは、中々にくる物がある。全く、狡いのは君も同じじゃないか。

なあ、トレーナー君。

世界は美しくはないかもしれないけれど、それでも。私達を出会わせてくれるくらいには、優しいんだ。



担当ウマ娘、シンボリルドルフが負けて。世間は私に責任を求めてきた……などと言  
うといかにも深刻な事態に聞こえるのだけれど、私にとつては案外そうでもない。

SNSは公式的にやらされているものだけだし（botにしてすぐに学園に管理をぶ  
ん投げた）世間の顔色を伺うほど纖細な性格もしていなかつたから。

だから、数少ない友人——と言つても同僚だが——から教えてもらうまで、どんどん  
悪評が加速していることにも気づかなかつた。

「うわー…………すごいなあ。流石に、ルドルフには見せられないね」

よくもまあこんなに思いつくものだと、いう罵倒の数々から、昔懐かしい技術、アイコ  
ラで作られたと思しき私の……まあ、そういう画像まで。SNSを調べてみればそんな  
もの達がすぐに見つかつた。

一先ず名誉毀損で訴えるために名前をリストアップしておくとする。SNSの誹謗  
中傷の慰謝料の相場は十→五十万らしい。濡れ手で粟の大儲け。ガポガポですわ！  
画像に関しては甚だ不服だ。男になぞ興味はないし、大体私の胸はもつと大きいんだ

が。そこらのAV女優程度が私の美しさに勝てると思わないで欲しい。顔も身体もどう考へても私のほうが優れている。

とりあえず私の胸の方が大きいと反論を流しておこう。『コラージュ乙。どう考へても映像見た感じルドルフのトレーナーのがスタイルいいだろ。童貞には分かんないか』こんなもんか。

あとは名誉毀損の裁判を起こす時用に弁護士でも探しとくか。それに散々悪評を流してくださつている出版社を調べて、学園を通して訴訟を起こしてやろう。

そんな諸々をやつていてるうちに気づけば時間が経つていて、深夜を過ぎて、眠気に耐えきれずに寝落ちしていた。

部屋に入ってきた陽の光で目を覚まして。時計を見れば十四時……十四時？

「お、終わった……」

完全に寝坊だ。携帯の通知を見ればルドルフと、それにたづなさんからの大量の通知が入っていた。とにかく謝罪の文章を……ダメだ、寝起きで頭が働かない。とりあえずシャワーを浴びて目を覚まさう。

寝惚けていたからだと言い訳をさせて欲しいのだが、シャワー中に一つ考えが思いついてしまった。

慰謝料を狙うなら傷ついているとアピールできたほうが良いのでは？ つまり手首

をぶつた切つて傷でも作つておいたほうが良いのでは？ ついでに目も覚めるし。

ぼんやりした頭で剃刀を手にとつて、手首に当てて引いて痛みで正気に戻つた。何やつてるんだ私は。

一先ず血を洗い流して切つた所を圧迫して出血を止める。そこでインターほんが鳴つてることに気がついた。

たづなさんあたりが様子を見に来たか？ と思つたが声でルドルフだと分かつた。最低限の身支度を整えて迎え入れる。様子を見てこいつて言われたのかな？ と思っているところで、どうにも顔色を悪くしていることに気がついた。

それは……？ と震える声と共に手首を指さされて、ちゃんと止血できていない事に気づいた。

包帯を巻くのを手伝つてもらって、何をしていたのかという質問に答える。

何を、と言われば訴訟の準備なのだが。一言で言うなら……。

「仕返し？」

私の言葉に、そんな事しなくともなんとかしてみせると言われたから、少し意地悪しだくなつて、何も出来なかつたのに？ と返す。これだけ酷くなつているということは多分そういうことだろう。

私の言葉に、ルドルフが余りにも……そう、泣きそうな顔をしていたから。思わず氣

持ち悪い笑いが浮かんでしまった。

もつとそんな顔が見たくなつて、いかにもこの状況に傷ついていますというような風を装つて言葉を続ける。ルドルフは優しいから、私が傷ついている事には耐えられないだろう。

蒼白、という言葉ですら生温い顔をしている彼女に少しやりすぎたかと反省する。流石にもう止めておくべきかと、とりあえずルドルフに帰つてもらおうとしたところで、彼女に抱き締められた。

(?!?)

「え、柔らかい。でも筋肉のがつしりとした感触もある。ルドルフ結構胸あるな。てか顔近つ！ そして顔良すぎ。私と同じくらい美人だよな。ああ、なんかいい匂いもする。

「好きな人を死なせるくらいなら、力づくでも私の物にする」

「好き……好き!! え、な……え?」

告白されたことがないような初々しい人間ではないけれど、こんな美人の、しかも教え子に告白されたのは初めてだ。

思わず顔が熱くなつて、我慢できずに抱き締め返す。

好きだよ、と返してやれば私を抱き締める力が少しだけ強くなつた。

こんなに良い思いをしてしまつていいのだろうか。  
今日の世界は、どうにも私に優しすぎる。

# シリウスシンボリ

折角の休みなのだからと、街まで繰り出して楽しんでいたのに。突然の雨に台無しにされた。

天気予報は一日中いい天気になる、などと言っていたのに。全く誰に許可をとつてこんな天気になっているのやら。

一先ず手近にあつたコンビニの軒下に避難するも、どこかの店に入つて雨宿り、なんてするには最早手遅れなほどには濡れ鼠だ。

軟な鍛え方はしていないつもりだが、それでも確かに体温は奪われていく。このままにしていれば、風邪を引くのは最早確定路線だ。

温かいシャワーを浴びたい。身体の芯から温まりたい。

そんな事を思つて、それが無理では無いことに気がついた。アプリを起動して、濡れて操作がしにくい手でメッセージを送る。

既読の通知はつかないが、どうせ寝ているか部屋で動画でも見ているだけだろう。

ここからなら大した距離もない。身体を温めるのにも丁度いい。ウマ娘らしく、走つて彼女の住んでいるマンション（アパートかもしれないが、違いをよく知らない）へと

向かう。

雨脚は強くなるばかりで、走っている間に汗だか雨だかわからなくなるぐらい、全身に濡れてない所は無くなつた。どうせ濡れるならジャージを着ているときにでもしてもらいたいものだ。肌に張り付く下着の感触が気持ち悪い。

ようやく辿り着いて、インターホンを鳴らす。三、四回鳴らしたところでようやく起きたようで、スピーカー越しに彼女の声が聞こえる。

開けてくれ、と頼めばすぐに扉が開いて迎え入れられた。

「また今日も急だね……うわ、びちよびちよじやん。タオル……いや、シャワー使う?」

「助かるよ……アンタは、その間にちやんとした服を着ろ」

やだよ、面倒だもん。なんて声を聞き流して、勝手知つたる彼女の家の浴室へと向かう。後は任せておけば、文句を言いながら洗濯も、着替えの準備もしておいてくれるだろう。

本音を言えば浴槽にも浸かりたかったのだが、やはりメッセージは見なかつたらしい。まあいつものことだ。彼女がこまめに通知を確認している姿など想像もできない。

浴室の、高くも安くも無いそれなりのシャンプーとボディソープを拝借して身体を綺麗にする頃には、シャワーの温かさでそれなりに身体は温まつた。

タオルで水気を拭き取つて、用意されていた服に身を包む。身長も体型も似通つてい

るから、サイズが合わないとはならないが、流石に尻尾の穴が無いからそこは窮屈だ。

「なあ、穴空けていいか?」

「ダメに決まってるでしょ。ほら、乾かしたげるからこつちおいで」

ドライヤーを手にした彼女に招かれるままに、大人しく身を任せた。髪も尻尾も任せていいと思えるくらいには、信用している。

ドライヤーの温風と、髪を撫でる彼女の手の感触が心地良い。初めてやらせた頃はもつと雑だった癖に、何度も任せているうちにどんどん上達していった。

終わつたよ、という声に少し寂しくなる。そんな内心を悟られる訳にはいかないから、お疲れさん。と余裕ぶつてねぎらいの言葉をかける。もつとちゃんと感謝しなさいという言葉とともに、軽く頭を叩かれた。私にこんな扱いをするのはコイツくらいだ。それが楽しい、なんて絶対に言つてやらないが。

「アンタ、今日は何してたんだ? 私のメッセージも無視して」

「無視……? あー、ほんとだ。気づかなかつた。別に、いつもどおりだよ。お酒飲んでダラダラしてただけ」

「薬は?」

「今日は飲んでないよ……何、私のこと心配してくれてる?」

「別に。雨宿り先が無くなつたら困るだけだ」

「ふふつ。シリウスは優しいね」

「アンタさては人の話聞いてないな？」

酒と睡眠薬と向精神薬のカクテルを作つていなければ取り敢えず一つ安心材料か。生死に頓着しないこの人は、危ないから止めろと言つても聞きやしない。

本音を言えば、薬だけでなくアルコールも止めてもらいたいものだが。強いから。と言つているし、実際に急に訪ねようと酔い潰れているような姿は見た事無い。

ただ、強い酒を好んで飲んでいる事は知つていて。

机の上の酒瓶を見てみれば、40%の文字。どう考へてもこれだけで飲む物では無いと思うのだが、部屋を見渡しても混ぜ物が見つからない。ツマミの空き袋は幾つかあるが。

「酒つて、そんないいモノなのか？ アンタ、いつつも飲んでるけどさ」

「アルコールは、現実から逃げたい人間への神様からの贈り物だよ。現実が辛ければ辛いほど、美味しくなるんだ」

「だから私が居る時は飲んでないのか？」

揶揄うつもりで言つたそんな言葉。実際は未成年の目の前で飲むのは良くないとか、その程度の良識だろう。

「ん？ そうだけど。シリウスが居る時は辛くないからね。君がずっと居てくれればお

酒も止められるんだけどな」

「……本当に。どうにもコイツにはペースを握られてばかりだ。相手を照れさせるのはむしろ私がいつもやっている事の筈なのに。

「あははっ、顔赤くなってるよ。……冗談だよ。子供にそんな事頼まないって」「やめろ、頭を撫でるな。…………傷、また増えたな」

子供扱いされて、頭を撫でられて。どうしたって視界に、傷だらけの手首が映り込む。下手に止めさせて悪化する方が怖いから。死なない程度なら好きにしたらいいと割り切つていい。

だがそれはそれとして。傷跡を見るのは気分の良いものでは無い。それが好意的に思つていい相手なら尚更に。

「え……？　ああ、手首？　まあね。本当に、やつてられない人生ですよ。……ごめんね、汚いもの見せて」

自嘲するように、自分を貶めるような事を言う。そんな事は無いと否定してやりたくて。彼女の腕を取つた。

指先で、幾筋もある傷跡をなぞる。

触れた瞬間声を上げるものだから、痛かつたかと焦つて問えば、ただ擦つたかつただけらしい。

古い、もう消えかけている傷跡から。新しい、まだ瘡蓋になつてゐる傷跡まで。手首から前腕の真ん中ほどまで傷が付いている。

「…………！」と少しだけ大きい、艶めかしい声に驚けば、少々夢中になりすぎてしまつたようで、瘡蓋が剥がれ、赤色が僅かに滲んでいた。

その赤が。彼女が生きている事の証明が。言葉に出来ない程に綺麗に思えて、気がつければ、その傷口に舌を這わせていた。

「ちよつ…………！」シリウス、汚いって！　あとなんか恥ずかしい！」

「止めてほしけりや抵抗すればいいだろ？」

彼女が大声を出すのは珍しい。大人っぽい……というか、事実大人なのだが、そんな彼女が少女のような反応をしているのが、少し面白かった。

大した血の量でも無し。何度か舌を動かせば、それだけで綺麗になつた。

「ほら、私なりの謝罪だ。止血と消毒。光栄に思えよ？」

「…………なんか、違う意味で汚された気がする」

「おいおい、私は汚れか？　傷つくね」

そうじやないけどさ、と言つてゐる彼女は、少しだけ満更でもなさそうにも見えた。

「嫌なら、もう手首切るなよ」

「…………切つたら、またしてくれるの？」

「お前……わざとやるような奴のところには、もう来ねえぞ」「シリウスがそういうこと嫌いなのは分かつてるよ。うん、まあ……なるべくやらないようにはするよ」

その言葉が、少しでもアンタを繋ぎ止める鎖になつてくれればいいが。誰よりも優しいアンタは、その分誰よりも傷ついていて。しかもそれを誰にも相談しようとしない。

アンタの事を慕つてている人だつているのに。力になりたいと、そう思つてている人だつているのに。自己評価の低いアンタはそんなことにも気づかないし、認めようともしないんだろうな。

「なるべく。じやなく、止めるつて言つてほしいんだけどな」

「……出来ないことは言わない主義なんだ」

気まずそうに顔を少し背けて、そんな事を言う。大人の癖に、可愛らしい仕草をするものだ。

こんな近くに居るのが悪いと、心の中で誰に言うわけでもない言い訳をして。彼女の背中に手を回す。少しは照れて欲しいものだが、手慣れた様子で抱き締め返してくる彼女に、少しだけ複雑な感情を覚える。

「どうしたの？ 甘えたくなっちゃった？」

「……いや？ その余裕を、奪つてやろうと思つてな」

首筋に口を近づけて、牙を突き立てる。

「……どうにも、彼女が痛みを堪える声は官能的な響きがある。ゆつくり私の存在を刻み込んでから離せば、くつきりと残つた歯型と、彼女の首と私の口を繋ぐ唾液の橋が残つた。

「……リスクなんかより、こつちの痛みの方がいいだろ？」

「うん……すぐ、良い。ね、もう一回してよ」

リクエストにお応えしてもう一度。しつかり覚え込ませるよう。囁む力だけで私はと分かるように。

「あー……ヤバイね。癖になりそう」

「被虐趣味でもあるのか？」

「そうじやないよ。シリウスにしてもらつたから、良いの」

「……また、生きてるのか分からなくなつたら。自分を切るより、今の痛みを思い出せ」  
生を実感するために死に近付こうとする。自分が生きている証を見ないと生きてい  
ると思えない。かつてそんな事を語つていた彼女は、やはりどこか壊れてしまつて  
いるのだろう。

傷ついて欲しくない、死んで欲しくないというのも、单なる私の我儘に過ぎないのか

もしれない。

「……やっぱり、シリウスは優しいねえ」

それでも、私はアンタと過ごす時間が好きなんだ。

アンタにとつて、私は何なんだろうな。

それなりに、好いてくれているのだろうとは思う。時々甘えてくれるし、可愛がられている自信もある。

ただ、どこまで本気になつてくれているのだろうか。私が子供で、彼女は大人だから。どうにも一線を引かれているように思う。

金銭のやり取りで生み出される偽物の愛に慣れれた彼女は、私の思いをどう感じているのだろう。子供の一時の憧れだとでも思われているのか、見慣れた偽物だと思っているのか、それとも、少しは伝わっているのだろうか。

愛してる、なんて言葉は聞き慣れているのだろう。簡単に口に出せる言葉に、そんな軽いものに。きっと意味なんかない。

私は、そんな軽薄な言葉を並べ立てるようなヤツにはならない。いつかアンタが信じてくれるまで、態度で、心で、示し続ける。

ずっと一緒に居られなくとも。アンタがそれを望んでいなくとも。

せめて、雨が止むまでは一緒に居よう。



休日のお供は、大体の場合アルコールだ。

昔は朝から飲むということに罪悪感を感じていたような気もするけれど、最早慣れてしまつて休みの日のルーティーンと化している。

ネットで動画サイトだつたり、流行りの映画だつたりを垂れ流して寂しさを紛らわせつつ、アルコールで脳を麻痺させる。

面白さはよく分からないし、別段興味があるわけでも無いのだけど。無音は寂しいし、話題作りにもなるから仕方がない。まあ、知らない人に教えてやるのが楽しいという客も居るけれど。そういう時は知らないフリをするだけだ。

一つ映画を見終わつて。ふと外を見てみれば大雨が降つていた。

晴れているからと出かけようとしなくてよかつたと、自分の判断を褒めつつ携帯を見てみれば、愛しい相手からのメッセージが入つていた。

シリウスシンボリ。彼女と初めて会った時もこんな雨の日だつたつけ。

気まぐれに外に出て、濡れ鼠になつていた女の子を家に招いた。言葉にすればそれだけの、大して特別でもない出会いだつたのだけど。彼女からしたら自分の存在を知らない相手というのは珍しかつたらしい。

そんな事を言うウマ娘ということは、きっとそれなりに有名なウマ娘なのだろうけど。生憎私はレースとかそういう物には余り興味がない。あんなキラキラした世界は、少しばかり眩しそぎるから。

そんな態度が尚更気に入られたようで。アンタと居ると気楽でいい、なんて言いながらふらつと家に遊びに来るようになつた。私も……まあ、寂しさは紛れたから、来てくれるのは嬉しかつた。

何度か逢瀬を重ねて いるうちに、色々な事を話した。仕事とか、家族の問題とか、子供に聞かせるのはどうなのかと思う内容も結構あつたのだけど、これで離れる相手ならどうせ長続きはしないだろうとぶちました。

幸い、と言うべきか。蔑まれることも憐れまれることもなく、私達の関係は続くことになつた。

そんな出会いの話はさておいて。メッセージを確認すれば、雨に降られたから家に行かせろとのことだつた。風呂を沸かしておいてくれ、などという図々しさも彼女らしさ

い。

タオルと着替えを用意しておく。風呂は沸かさないしメッセージに既読も付けない。何もかも思い通りになると思わないで欲しい……なんて理由ではなく、彼女にはその方がウケが良いからだ。反骨精神とでも言うのか、自分に従わない相手の方が好ましいらしい。

インターほんの音が、彼女の来訪を知らせる。待ち望んでいた、なんて思われたくないから。何度か聞いてから出ることにする。

開口一番、ちゃんとした服を着ろと小言を言われた。別に誰に見られるわけでも無いのだから良いじゃないか。シリウスにならむしろ見せつけてやりたいぐらいだし。まあその程度で誘惑されるとも思えないけど。

取り敢えずびしょびしょのシリウスを浴室に向かわせて、その間にドライヤーを用意したり部屋を言い訳の出来る程度に片付けたりする。

暫く待つて、湯上がりのシリウスの髪やら尻尾やらを整えてやる。初めての時はウマ娘の尻尾などどうやって取り扱ったものかと悩んだけれど、今となつては慣れたものだ。

それにもしても。若さ故なのか、肌も髪も綺麗で羨ましい。私も十代の頃は……いや、栄養失調とかで酷いものだつたつけ。

名残惜しいけど終わらせて、生意気なことを言う彼女を軽く叱る。

何をしてたのかと聞かれ自分の行動を思い返して、酒飲んでただけだなど気づいたからそう答える。薬は……今日は、飲んでいない。アレを飲むと一日何もできなくなるし、翌日にも残るから。できれば飲まずに済ませたい。

シリウスと少しお酒の話。飲んでみる？　と言いたかつたけど、流石に捕まるのは勘弁だ。

私がお酒を飲むのは、素面じや現実の辛さに耐えられないからだ。せめて誰かそばに居てくれるなら。シリウスが一緒に居てくれるなら、お酒なんていらなくなるかもしないのに。

アルコールは、結局の所本当に欲しい物の代替でしかない。

軽くからかうだけで顔を赤くするシリウスの少女性が愛おしくて、ついつい頭を撫でる。本当は私のような汚い人間が触れてはいけないのだろうけど、ここでは誰も見ていないのだから許して欲しい。

撫でた手首を掴まれて、流石に嫌がられたかと思えばなんのことはない。ただ傷が増えていることを見咎められただけだ。

ストレスの解消と、貴女のその顔が見たくて。こんな事を続けている。

傷を撫でられて、むずむずとしたくすぐったさを覚える。皮膚が薄くなっている分神経が敏感になつてているのだろうか。

最近作つた傷を撫でられて、瘡蓋が剥がれた時には流石に声が出た。痛みではなく、倒錯的な快感で。シリウスのくれるものなら、痛みでさえ愛おしい。

ただ、流石に。その滲んだ血を舐められた時には驚いた。私の体液が取り込まれるという淫靡さと、汚いものに触れさせてしまつたという焦りで。思わず大きな声が出た。思わず。また切つたら、もう一度してくれのかと聞いてしまつたのは、流石に失敗だつた。そんな面倒な女は愛想を尽かされるだろう。

なるべくやらないようにするから、と言つて機嫌を直してもらう。止めて欲しいらしいが、私は、君が私の傷を見た時の顔が好きなんだ。

そんな私を、貴女は抱きしめて。自分で行う自傷行為などとは比べ物にならない快感をくれる。貴女の牙が私に突き立てられた時、脳が痺れるような感覚を味わつた。

もう一回、と思わずねだつて、すぐにその望みは叶えられた。  
死にたくなつたら、今の痛みを思い出せ。

まあ確かに、この快感を味わうためならもう少し生きてみてもいいのかもしねない。

友人は居ない。家族も居ない。趣味も無ければ、生きる理由も無い。

そんな私の前に現れた一等星。

何故彼女がこんなに慕つてくれてているのかは分からない。どこか通じ合う境遇だつたのかもしないし、偶々波長が合つたのかもしないし、別に私だけじゃなく色んな人にこういう事をしているのかもしれない。

私が手に入れられる、なんて思うほど自惚れでは居ないけど。こうして抱き締めあつてている間だけは私のものだ。

傷を付ければ、私のことを心配してくれる？ 私が死んだら、貴女の心のどこかを占領できるのかな。

ああ、雨が止まなければいい。

そうすれば、ずっと一緒に居る理由になるから。

## 【閲覧注意】ダメお姉ちゃん持ちのカレンチヤン

『歩けそうにないから迎えに来て』

可愛らしいスタンプと共に唐突に届いたメッセージに思わずため息がこぼれる。いくら休日だからといって、学生を夜中に呼びつけるのはどうなの？ そもそもこちらに用事があつたらどうする気なのか。

放つておけないダメ人間というのはなんともたちが悪い。カレンも可愛く思われているのだろうと理解して色々することははあるけれど、お姉ちゃんのあれは天然なかも。

なるべく地味な、尻尾を隠せる服を見繕つて、耳を隠すための帽子をかぶつて出発する。流石に夜中に繁華街に居るというのはカワイイ無いから。

支度を済ませ、送られてきた位置情報の所へと向かう。いつものところだ。これで何度目だっけ？

一度痛い目を見れば反省してやらなくなるのではないかと思つて、無視してみたことは既にある。

その時は、ちょっと口にするのは憚られるような方法をとつてきたから。結局問題を

起こさないためにもカレンが行くのが一番いいのだ。……どうにも、貧乏くじを引いている気がするけど。

せめてお酒を控えてくれれば、もつと胸を張つて、好きな人に迷惑をかけられるのも楽しいよ、って言えるのに。今はどうにもカレンが悪化させている気がしている。でもカレンが見放したらもつとダメになっちゃう気がするしなあ……

どう対応したものかと考えながら、最早見慣れてしまつたお店へと向かう。店員さんは顔を覚えられているから、呆れた顔をされつつもすぐに場所を教えてもらえた。空いたジョッキに囮まれて突つ伏しているお姉ちゃんを一先ず起こす。

「飲み過ぎだつて……ほら、帰るよ」

「まだ大してのんないもーん。カレンものもーよー」

「お姉ちゃん……未成年の飲酒は炎上じやすまないよ……立てる？」

「むーりー、おぶつてほしいな」

にへら、と笑いながら甘えてくる。甘やかしちゃダメだと分かつてはいるのだけど、声も仕草も可愛すぎて、ついつい怒る気を無くしてしまう。

「肩貸すから我慢して。お姉ちゃんデカいんだから」

鞄を勝手に探つて財布を取り出し、会計を済ませる。レシートを見る感じかなりの量を飲んでいる……のは、まあいつものこと。

ご迷惑をおかけしましたと店に頭を下げれば、その分注文してくれるし、あの人人がい  
ると客が増える、とのこと。

ま、妹ちゃんは大変かもしけんがな！ と笑っている店長。そう思うなら止めてくれ  
てもいいと思う。

「ほら、服ちゃんとして！ 谷間見えてるから！」

「いいじやん、減るもんじやないし」

減るから。女性としての尊厳とかそういうものが。どうせ周りの客に見られてたこ  
とも気にしてないんだろうけど。いまいちその辺が緩いところも直して……直らない  
んだろうなあ……

色々と諦めつつ、肩を貸して帰路につく。

「ありがとねーカレン。愛してるよ」

そういう言葉は素面の時に言つて欲しい。……それでも嬉しいと思つちゃうのがダ  
メなんだろうな。

「はいはい、カレンもお姉ちゃんが好きだよ」

「心がこもつてなーい。胸揉むぞ？ ……厚着でわかりにく이나あ」

一度投げ捨てたほうが良いんじゃないと、少しだけ思った。

「カレン。前も言つたけど、今晚飲み会行つてくるから、明日オフで大丈夫?」

「カレンは良いけど、お姉ちゃん飲み会なんか行つて大丈夫? 迷惑かけない?」

「え? そんな信用ない?」

「むしろどうしたらあると思えるのか、カレンは聞きたいな」

トレーナーの同期会、とかなら最悪無理矢理ついていくのだけど。今回の中学だか高校だかの同窓会らしい。

行かないで、とも言いにくいし。泥酔を止めてくれる人が居るのかも分からぬ。色々と心配な飲み会だ。

「流石にカレンが迎えに来れない時にあんな飲み方はしないって。あ! いや! 別にカレンになら迷惑かけていいと思つてるわけじゃないよ! ただ、その……カレンに面倒見てもらえるのが嬉しくて……ああ、何言つてんだろ」

なんとも微妙に怒り辛い事を言うのか。けど、これはやつぱり面倒見るの止めたほうが良いんじやない? とも思う。甘やかしてるとせいでダメになつちやつてるのか、ダメだから甘やかしたくなつちやうのか。

「カレン今回は頼まれても行かないからね? お酒は程々にして、他人に迷惑をかけないこと! いい?」

「それはもう、気をつけます……」

不安だなあ、とても。

「今回なんかやらかしたら、ほんとに嫌いになるからね？」

「それはやだ！……余所行きの顔で行くよ」

それなら少しばかり安心？ 仕事中は百匹ぐらい猫かぶつてるし。

飲み会の最初と最後には連絡を入れることと、酔いを自覚したらそこで止めることを約束させて送り出す。これだけ言えば守つて……守る、かなあ……

これは担当ウマ娘として、問題を起させられでもしたらたまらないから。すぐに止められるように用心しているだけであつて、決してお姉ちゃんの面倒を見ているわけではない。

行き先は教えてもらえたかったから。こつそりと後をつけて追いかけてきた。お姉ちゃんもこの辺りには慣れていないのか、辺りを見回しつつ歩いていたせいで見つかりそうにもなつたけど、なんとかバレずに済んでる。

人が集まっているところに合流していくのを見守つて。その店が見えるファーストフード店に陣取る。携帯に『始まりました。終わつたらまた連絡入れるね』とメッセージが飛んできたのを確認して、とりあえず覚えていたみたいと一安心。

ドリンク一つで粘りに粘つて。新規メッセージを知らせる音。『二次会に行つてきま

す。終わつたら連絡するけど寝てていいからね?』だそう。

『酔い潰れてない?』とメッセージを送れば、『最初の一杯だけにしたよ』と返ってきた。  
まあ、酔い潰れてたらこんなメッセージもしてこれないよね。

店から出てきた集団は三々五々色んな方向へと向かっていく。二次会と言つていた  
し、仲のいいグループで固まつてゐるのだろう。

他の人はどうでもいいから、お姉ちゃんを探す。背が高いのは目印にもなりやすいみ  
たいで、そんなに苦労することもなく見つけた。

しつかりとした足取りで楽しそうに歩いていたから、これは大丈夫かなとも思つたけ  
ど。

人を見た目で判断するのは良くない、なんて頭では分かつてゐる。でもいかにも遊んで  
ます、といつた風貌の人たちに囮まれていたら、心配になるのもしようがない……と、思  
う。

あまり治安の良くない——というのは言い過ぎだけど——裏路地の方に行くから、  
こつそり追いかけるのがちよつと大変だつた。

こじんまりとしたお店に入つていくところまで確認して、さてどうしたものかと思  
案。

今度はさつきみたいに都合のいいお店も無くて、自然に見張るのは難しそう。

諦めて帰ればいいと思わなくもなかつたけど、どうにも胸騒ぎがしたから。結局コソコソと隠れつつ様子を伺うことにしちやつた。

なんでこんなカワイく無いことをしてゐるんだろうって気持ちと、どんどん強くなる胸騒ぎを感じながらお姉ちゃんを待つ。

さつきから送つてゐるメッセージに返事が返つてこない。話が盛り上がり携帯を見ていないとか、そんな理由だと自分に言い聞かせる。……早く、安心したいな。

思つたよりもずっと早く、お姉ちゃんを含めて入店したグループが出てきた。

一瞬お姉ちゃんが見つからなくて、何処かと思えばグループの一人に背負われていた。

ここだけ見たら、ただ今回はあの人に甘えたのだなとも思えるんだけど。

その人達の後をつけたのはただの直感だ。ただの杞憂なら、或いは野暮な事をしていただけなら。分かつた時点でその場を去ればいいから。

……ウマ娘の聴力は、ヒトのそれと比べるとかなり高い。だから、その人達が話していた。下衆な会話も聞こえてくる。

「昔から顔と身体は良かつた」「警戒心の足りないバカ女」「薬を混ぜた」

初めての感情が湧いてくる。

「誰が最初にやる?」「途中で起きるんじやねえの?」「写真でも撮つとけば脅せるだろ」

今すぐあの口を閉じさせたい。

「じゃあ俺から」「中はあんま汚すな」「そんぐらい我慢して使え」「ねえ、そこのお兄さん達。ちょっとだけ『おはなし』しようか?」「これ以上。大切な人を愚弄されるのは我慢できなかつた。

流石に人を一人背負つて帰るには距離があり過ぎ、公共交通機関を使うには時間が過ぎた。

そういう事目当てで声をかけられるのが嫌だつたから、近くにあつたカラオケに入る。泥酔客は困るんだよね。と最初は渋られたけど、事情を話せば受け入れてくれた。人の気も知らずにスヤスヤと膝の上で眠つてゐる。黙つてれば本当に美人なんだけどな。

なんとなしに髪を触つて、身じろぎする様に起こしてしまつたかとちよつぴりの罪悪感。

「……あれ、カレン? ……え、あれ?」

「……おはようお姉ちゃん。具合、悪くない? 身体に違和感とか」「ん……なんか、頭痺れてる……身体ダルいし……ああ……薬、かな。久々の感じ……」

めん、迷惑かけてるね。最悪……消えたい……」

「これは、お姉ちゃんのせいじゃないから。……せめて、カレンが居る時で本当に良かつたなつて」

来てなかつたら。多分、酔い潰れたのだと思つて、何も知らずに怒つっていたと思う。そんな最低な事をしなくて済んだのは、不幸中の幸い。

「カレンに、あんなところ見られるぐらいなら、どうなつても良かつたのに。……嫌なもの、汚いもの、見せちゃつたよね」

「ど……どうしたの、お姉ちゃん。……いつもみたいに笑つて済ませてよ。今日に比べたら、普段の方が大変かなつて、カレンは思うな」

ただ、どうにも様子がおかしい。それは、襲われかけたのだから。動搖するのも無理はない……のだけど。それが理由というには態度に違和感がある。

「ごめん、ごめんなさい……違うの。誘つてなんかない、誑かしてなんかない」

ふと、どこかで聞いた、睡眠薬の副作用を思い出した。薬で悪夢なんて起きるんだと、印象に残つたから。

「……大丈夫。カレンは分かつてるから。お姉ちゃんは、何も悪くないって」

「お父さんは私が悪いって言うの。お前の身体が悪いって。お前が誘つてくるのが悪いんだつて」

涙と嗚咽に彩られたそれは。聞いたことの無い、お姉ちゃんの昔の話で。

「お母さんには殴られた。親を誑かす淫売だつて。お前なんて産まなきや良かつたつて」

知識としては知つていても、どこか別の世界の事のように思つていた話だつた。

ごめんなさい、ごめんなさいと泣いている彼女に。どうしたらいいのか分からなくて、何を言つてあげればいいのか分からなくて。結局出来たのは、膝を貸してあげることと、根拠の無い大丈夫という言葉だけ。

泣き疲れたのと、多分薬がまだ残つているのだろう。嗚咽が止んで、規則正しい寝息が聞こえてきた。

慕われる、人に好かれるというのが良いことだけじゃないつていうのは、カレンも知つていてる。

良いことと悪いことは切り離せないもので、都合のいい片方だけを手に入れる、なんてことは出来ない。

お姉ちゃんの過去は知らないから、推測することしか出来ないけど。さつきの飲み会で周りに同性が居なかつたのもそういう事なのだろうか。

恋心は、簡単に人をおかしくさせるから。

誰かの好きな人に告白されて、周りから誑かしたとか身体で誘つたとか言われる、なんていうのはいかにもありそうな話だ。

それに、あのうわ言。

誰もが一番安心出来るはずの、家族という狭い世界が地獄だったとしたら。子供に何が出来るというのだろう。

想像することすらおこがましい。多分、カレンには本当の意味で理解はできない。なんとなく。お姉ちゃんの刹那的な生き方の理由が分かつた気がする。

きっと。過去に、何一つ価値なんて感じてない。未来に、何一つ期待なんてしてはない。

現在を作るのは、過去の積み重ねと未来への希望だ。ならその二つが無かつたら？ 場当たり的に楽しいことに飛びつくのは、そんな虚無感からでは？

単なる推測だけど、大ハズレでは無いと思う。

わざと困らせて、甘えてくるのは。きっと本心では誰も信じてないから。

どうせあなたも離れるんでしょう？ 今は違うとしても、次は？ その次は？

そうやって試して、離れていく相手を見送って。ほらやつぱりと悲しく笑う。

ならカレンは、ずっと。何があつてもお姉ちゃんを支えよう。

きっと、正しくはないのだと思う。こんなやり方は、たとえ上手くいっても依存されるだけだろう。

人との距離感を学ばせて、自分で生きる理由を探させて。自立を促すのが賢い、正し

いやり方だ。

でも、正しさが人を救うとは限らない。ずっと傷つけられてきて、誰にも手を差し伸べて貰えなかつた人を。自分で立てと突き放すのが正しさなら。そんなものは必要無い。

世界が優しくないのなら、カレンだけは優しくありたい。

この想いは、愛と呼ぶにはあまりに身勝手だ。

◊? ◊? ◊?

人を信じられなくなつたのはいつからだろう。視界に入る全ての人間が何をしているのか把握出来無いと不安になるようになつたのは？ アルコールで紛らわせる事でしか現実に耐えられなくなつたのは？

人格というのは結局のところ過去の積み重ねで出来上がるのだから、きっとその問いに答えはない。無理矢理答えるのなら、全て共通で『いつの間にか』だ。  
だから今日も。まともに脳内物質も出せない、役立たずの脳をアルコールで黙らせ

て、甘えという迷惑をかけている。

今の担当ウマ娘との出会いは、ゴミのような人生の中でもうやく一つあつたマシなことだ。

優秀で、割と懐いてくれて、迷惑を許容してくれている。

普通に付き合つていけば。それなりの人間関係が築けて、まともに生きる一歩目になるのかもしれない。

ただ悲しいかな。私には普通が分からぬ。相手が腹の中で何を考えているのかを理解する事は出来ないから。どうやつて人を信じたらいいのか分からぬ。

故にこうして、試すようなことをする。これは許容してくれる。なら次は？　これは見捨てられる？

結局何をしても私には信頼なんて出来ない以上、いつか破綻するのは目に見えている。

……ここまで理解した上で、それでも試すのを止められないあたり、私は本当にどうしようも無い。そんな自分への失望を、未来への恐怖を、世界への諦観を。アルコールを流し込んで誤魔化す。

意識が大分曖昧になつてきた所で、身体の振動と聞き慣れた声に気づいた。今日も迎えに来てくれたらしい。今日も見捨てないでいてくれたらしい。

今のところ、十数勝一敗だ。来てくれた回は、コイントスを十連続で当てるギャンブルに勝つて店に泊めてもらつた。カレン——担当ウマ娘——には、身体で寝床を買つたと伝えた。その時は、凄まじい顔をされて暫くお説教を聞いたつけ。怒られるのではなく叱られる、というのは初めての経験だつた。

肩を借りて帰り道を歩く。体格差の関係で、肩に回つた手が丁度胸に当たる。身長の割に胸がデカいよなあ……なんて回らない頭で思う。軽く手に力を込めると抗議の視線を向けられたが、投げ捨てられはしなかつた。これは何勝何敗だつたかな。

同窓会というものがある。昔を懐かしむ、というのは私には理解のできない感覚だけど、世間一般的には歓迎させるべき会合らしい。

私が行つて樂しめるとは思わない。学生時代なんて不快なことばかりだつたし、交流の残つている友人も居ない。ただまあ、それなりに懐かしい人とかも居たから、行くだけ行つてみようと参加希望を出した。気まずければ、最悪流れを無視して帰ればいい。どうせ、二度と会わない人達なのだから。

カレンに同窓会の事を伝えてみると、心配されつつも反対はされなかつた。いつそ付いてくるとでも言われれば面白かつたのだけど、流石にそれは無いようだ。幾つか約束を交わして、話を終える。ほんとに嫌いになる、という脅しは中々に心に

響いた。

どうせそのうち嫌われる、と試すような事を普段からしている私だけど、別に進んで嫌われたくはない。

地図アプリを頼りに知らない街を歩いていると、ふと視界の端に見慣れた芦毛があつた。

変装していようと、カレンの芦毛は間違えない。他に覚える人間がいない分、脳の記憶領域をカレンに割いている。

心配して付いてくれた、というのは素直に嬉しい。やはり、優しい子だ。それだけに、こうして私のようなクズに依存先として狙われるのは可哀想ではあるけれど。

それはさておいて。集合場所として指定された場所に着く。大分遅い方だつたようで、かなりの人数が既に集まっていた。

やはり見渡しても誰が誰だか分からなくて。名乗つてもらつてようやく、ああそういうえばクラスにそんな名前の人居た、と気がついた。

店に入つて、割とすぐに同窓会に来た事を後悔した。女性陣はあの頃と変わらず敵視してくるし、男性陣は相も変わらず胸ばかり見てくる。どちらも、バレてないとでも思つてているのだろうか。

何人か、それこそクラスの中心だつたような人と、僅かばかりの会話ををして。最低限

の義理は果たしただろうと一次会で帰ることにした。

そこに、大して仲も良くなかった男のグループから誘いがかかつたから。どうせそういう目的なのだろうと断ろうとして、ふと閃きがあつた。

誘いに乗つて、移動中にこつそりと辺りを見る。店に連れ込まれるギリギリで、芦毛の彼女が付いてきている事を確認して、閃きに従う事を決めた。

付いてきておいてこんな事を言うのもどうかと思うが、実につまらない集団に誘われたものだ。行為の事しか考えていません、と全身に表れている。

僅かな水音と、視界の端で捉えた動作から。薬を混ぜたなど察する。

理解した以上、さつさと警察でも呼ぶのが正しいのだろうが、それではなんの意味も無い。

せつかく、カレンが助けに来てくれるのだ。ならば囚われのお姫様にでもならなくては。……あまりに似合わなくて、自分で少し笑つてしまつた。

混ぜ物入りの酒を一息に飲み干す。二杯目で意識が曖昧になつてきて、三杯目は飲み干したかどうか、よく分からない。

夢を見た。実の両親の所で暮らしていた頃の夢だ。

夫婦仲が良好だつたのか、それともとつぶに冷めていたのか。それは最後まで知らな

いまだつた。

中学……一年か、二年の頃。夜中に目を覚ますと、父親が私の上に覆い被さつていた。声を出したら殺す、と言つた父の声は、どう考へても実の娘に向けるべきでは無くて。暫く、されるがままになつていた。

その間ずつとお前が悪い、お前が悪いと言われ続けて。何故かそうなのだろうと納得していた。——子供にとつて、親の言うことは絶対だ。

私の身体を覆う最後の布が取られる寸前で、部屋の外から聞こえた物音に救われた。母が起きていなければ、きっと最後までされていたのだろう。

何か勘でも働いたのか、物音で察したのか、はたまた他の理由か。

部屋に入ってきた母が見たのは、裸で娘の上に乗る夫の姿。

助けてくれる、そう思つた。この状況を解決してくれると。

その期待への答えは、顔面への殴打だつた。殴られて、罵声を浴びた。

ああ、世の中つてこんなもんなんだなど、その時に理解した。

夢と現実が混ざつてゐる。思つたよりも強い薬を使われたのかもしない。カレンが心配そうに顔を覗いている／誰かの罵声が脳に響く。カレンが体調を心配してくれている／誰かが私を嗤つてゐる。

カレンが優しく撫でてくれる／誰かが私の尊厳を奪おうとしている。  
私を罵っているのは、誰？

もう何も分からなくて、気づけば泣きながら謝つていた。

大丈夫、大丈夫と。優しい声と暖かな体温だけが頼りで。それだけが私の救いだつ  
た。

お願ひ、カレン。どうか、私を見捨てないで。

# エアグルーヴ

マシな言葉で言うなら、魔性の女性。

言葉を飾らずに言うのなら、節操無し。

私のトレーナーを一言で表すなら、そんな言葉が相応しい。

「貴様……また生徒に手を出したらしいな？」

「ご、誤解だよグルーヴ。向こうから告白してきただけで……私からは何も」

「その言い訳は、これで何度もだ？ 素直に断ればいいということを、いつになつたら学ぶんだ？」

指摘してやれば気まずげに目を逸らした。だつて断るのは可哀想じやないか。などと巫山戯たことを言つてゐる。百歩譲つてそれが本心だつたとしても、それなら可哀想ではない断り方でも練習すればいい。要は、このたわけは楽しんでいるのだ。

「それに……ほら、外の悪い男に騙されるよりは私のほうがいいだろう？ 少なくとも、妊娠の心配は無い」

思春期の年上への憧れというのははしかのようなもので、誰もが一度は経験するのだ

ろうが。だからといって促進させていいわけではない。

「全く……なぜ貴様のようなヤツがモテるのだろうな……」

「まあ、頬かな。それに、グルーヴ以外には完璧超人だと思われてるからね、私は」「何?」

「容姿端麗で、担当にトリップルティアラ取らせて、誰にでも優しいカツコいいお姉さん」  
「誰のことを言つているんだ? とツツコミを入れたくもなるようなセリフだつたが、確かに他のウマ娘から似たような言葉を聞いたことがある。貴女のトレーナーが羨ましいというような、そのような評価。

「そうか……外面だけは完璧だつたな……」

「まあね。部屋が汚いのも、料理ができないのも。知つているのは君だけだよ」

「嬉しくない秘密の共有だな」

「いつそバラしてしまえばいいのか? ……いや、それはそれで隙があると好意的に受け止められる予感がする。どうせなら節操の無さが広まつて欲しい。」

同性だから周りからの警戒が薄く、トレーナーだから年頃の女子と関わる機会がそれなりにあつて、求められれば断らない。

なんとも教育に悪い存在である。

「……なあ、貴様は年下の女にしか興味がないのか?」

「なんだい人を変態みたいに。男でも女でも、年上でも年下でも。私は私のことが好きな人が好きだよ」

むしろその方が救いようがないのではないか？ 要は誰でもいいということだろうに。いわゆる口リコンとどつちがマシかは悩ましいが。

「それなら都合がいい。いい加減学園外で恋人でも作れ。そうすれば貴様に憧れている生徒達も諦めるだろう」

「ええ……私は子供と恋愛ごつこしてゐるぐらいが気楽でいいんだけどな……」

「貴様の火遊びに学生を巻き込むな……大体、外に好いている相手の一人ぐらい居ないのか？」

居ると答えてくれれば話は早いのだが。其奴とくつければ全て解決……いや、その相手が既婚者だつたりしたら別だが。本気になれて、社会的にも問題のない相手を見つけてくれ。

トレーナーが本気になる相手とは、どのような相手なのか想像もつかないが。この軽薄な女性が、余裕を無くして顔を赤くしながら愛を囁いたりするのだろうか？ ……なぜだか、少しだけ面白くなかった。

「居るよ、好きな人。ただ、その人は私のことは眼中に無さそうだけどね」

「む……貴様らしくもない言葉だな。そんなに諦めの良い人間ではないだろう」

「……ねえ、グルーヴは。私が本当に恋人作つてもいいのかい？」

面白くない、と思つたことが見抜かれたようなそんな質問に、正直に答えるのは少しばかり癪だつた。

「プライベートにまで口出しはせん。犯罪でなければ、誰と付き合おうと自由だらう」「ふうーん。じゃあ、まあ。適当に見繕つてこようかな」

正直、断ると思つていたから。その言葉は少し意外だつた。適当に見繕う、という言葉に再びわずかばかりの不快な感覚が胸の内に湧き上がつたが、こちらから言い出したことだ。今更止めろと言う訳にもいかない。

その気になれば誰よりも魅力的になれる彼女だから。さほど日にもちも経たずに相手を見つけたと報告してきた。

それを面白くないと感じている自分が居て。提案したのは私だろうとその思いを振り払つた。

彼女自身が噂好きのウマ娘を選んで彼氏が出来たと話したようで、それはすぐに学園に広まつた。

一番人気のトレーナーが誰かの物になつた。というのを例えるならば、アイドルや俳優の結婚報告だろうか。

祝福する者や嫉妬する者、それでも諦めないと宣言する少し困った者。反応はそれぞれではあつたが、一先ず彼女への熱は落ち着いたと言つていい。

それはそれで彼氏との話を聞きたがつたりはされていいたようだが、歳下の学生から交際を申し込まれるよりは余程健全な関係性だろう。教育に悪い事まで言つていないかは少し心配だが。

数日間。その調子で時間が経つて。生徒達との噂も聞かなくなつて。ともかくこれで問題が一つ解決したと思つていた。

彼女の様子がおかしくなつたのは、その頃からだつた。

### トレーナーの様子がおかしい。

仕事に関しては何も問題はない。変わらずしつかりとトレーニングメニューは作られているし、書類に不備が増えたなんて事も無い。

ただ、少しばかり口数が減つていてる気がする。他人の気配にやけに敏感になつてている気がする。

何か疚しい事もあるのか？　と冗談半分で聞いてみれば、今まで見たことのない剣幕で否定されて。思わず耳を伏せれば、消え入りそうな謝罪の声が聞こえてきた。

いつも余裕があつて、少なくとも外面は完璧な彼女のそんな姿は初めてだつた。

だから、つい魔が差した。

トレーナー室に置き忘れられた彼女の鞄。なにか手がかりがあるのでは？ と思い、若干の罪悪感を感じつつ勝手に中身を探ることにした。

筆記用具、メモ帳、飲み物、印鑑。流石に携帯や手帳のような、プライベートが分かれそうなものは無かつた。携帯はともかく手帳は入つてゐるのではないか、日記でもつけていないかと期待していたのだが。

何も収穫は無かつたかと、出した物を元に戻そうとしたところで。底に何かがあることに気がついた。

取り出して確認してみれば、正体は錠剤の入つたシート。

「薬……？」

薬剤名が記されていると思しき部分は黒く塗りつぶされていて、その正体は分からない。シートに入つてているということはきちんと処方された薬なのだろうか？ 彼女が薬を飲んでいた覚えはないが。

何故、と問われればただの直感だが。彼女の様子がおかしい原因がここにあるのではないかと思つて。この手の薬剤に強いウマ娘の手を借りることにした。

「おや、副会長様が何のようだい？ 今日は規則に反した覚えはないが」

「今日はそうではない。これを——」

先程見つけたシートを渡して、正体を確かめられるか問う。私にも予定というものがと渡されたから、少し強引に。多少の規則違反への目こぼしを条件に協力を取り付けた。

らしくないことをしている、という自覚はある。……私の中で、彼女の優先順位は思つていたよりも高かつたらしい。

その様を面白がられたのか、憐れまれたのか。兎も角明日の朝にまた訪ねてくると良い、との言葉をもらつた。

そして翌日。トレーナーには用事があると朝練を無くしてもらつて、実験室と化した空き教室へと向かつた。

「ああ、来たか。結果から言うとだね。あの薬の成分は黄体ホルモン……いや、遠回しな話はよそうか。あれは経口緊急避妊薬。いわゆるアフターピルというやつさ。効果……は流石に分かるか」

女性として、そのような薬があることは知つていて。PMSなどでも用いられるピルとは用途が違うことも。必要になる場面も。

「私には似合わないセリフだがね。その薬を持っていたのが誰だか知らないが、慎重に接したほうが良い。……いつも笑顔でいる人が、本当に元気とは限らないからね」

その言葉が、どこか遠く聞こえた。

そんな薬が必要な理由。相手。あの態度。全部、私のせいだ。

自分を殺したいと、初めて思った。

どんな顔で彼女に会えれば良いのか、私が彼女に何か声をかける資格があるのか。何も分からぬままにトレーナー室に来てしまった。いつそまだ来ていないことを探りつつドアを開けてみれば、既に來ていたトレーナーの姿があつて。

「ああ、グルーヴ。用事はもう大丈夫? 忙しいならそれに合わせるけど……」

昨日のアレは夢だつたのではないかと思うほどに、いつもどおりの態度を見せる彼女。安堵感など全く感じられず、ただ痛々しく見えるだけだった。

「トレーナー……その、だな。……鞄の、薬を。……見た」

何を言えばいいのかと、悩んだ結果は事実を伝えるだけ。

「あー……無いと思つたんだ。その感じだと、アレが何だかも、分かつてる?」

「ああ。……私の、せいなのだろう?」

彼女が今どんな顔をしているのか。確かめるのが怖くて、俯いたままで話す。

「うーん……どうかな。私の人を見る目が無かつただけとも言える。だから……うん。だから、気にしなくていいよ」

それは許しの言葉ではあつたが、むしろ突き放されたように感じさせる言葉だつた。「……許してくれ、などと言うつもりはない。ただ、責任は私にあるのだから……出来ることなら、何だろうとするから……」

するから。なんだと私は言いたいのだろう。結局、許されたいだけなのではないか?

「あー……いや、そんな事しなくていいっていうか……うん。全部嘘なんだ。あの薬もネットで買つただけ。グルーヴに誰かと付き合えつて言われるのが嫌だつたからつい……」

「今更誤魔化さないでくれ! 私から、贖罪の機会まで奪わないでくれ……」

樂になりたいだけ。そう指摘されても否定はできない。相手が望まない贖罪に意味など無いだろう。

私のエゴでしか無い。彼女の優しさに甘えている。

それでも、何かしないと。……罰を受けないと、心が壊れてしまいそうだつた。

「じゃあ、ちょっと目を閉じてじつとしてて」

言葉に従い、その通りにする。怒鳴られようと、殴られようと。何をされても受け入

れようと覚悟を決め。

そして、彼女は。



子供の頃両親を見て、自分もいつかこうなるのだろうとなんとなく思っていた。悪い意味ではない。

ただ、いつか人生の伴侶を見つけて、子供でも作って、幸せな家族を築くのだろうと思つていた。

中学生ぐらいの頃。周りは好きな異性の話で盛り上がるようになつた。誰が好き。あの人気がカツコいい。誰と誰が付き合つている。よく分からぬ話だった。

『——ちゃんは、誰が好きなの?』

本当に、よく分からぬ話だ。

運命の人、なんて夢見ていたわけでは無いけれど。いつか好きな人ができるのではな

いかと思つていた。

偶々まだ良い人に出会えていないだけ。もつと色んな人と会えば。もつと色んな世界を知れば。

高校卒業の年、初めて恋人ができた。

それなりに仲良くしていた男子で、成績優秀な優等生で、人格も申し分ない。こんな人を好きになれたら、きっと『幸せ』なのだろうと思った。

元々友人であつたから。一緒に居るのはまあ楽しかった。

色々な所に出かけて、一緒に食事をしたりもして。周りから見ても仲の良いカツプルに見えたと思う。

ただ。両親がしていたように触れ合いたいとか、物語でよくある胸のトキメキだとか。そういう気持ちは、全く無かつた。

温度差のある関係が上手く続くはずもない。彼はなんとか私の心を向けさせようとするようになつたし、私はなんとか好きになれるよう無理をした。  
繋いだ手の感触も、囁かれる愛の言葉も。

全部。気持ち悪かつた。

結局別れたけれど、その頃はまだ楽観的でもあつた。あの人は『特別な人』ではなかつたけど、いつかは特別を見つけられるだろうと。

大学生になれば。年上なら。年下なら。女性が相手なら？　身体を重ねたら？  
結局。誰のことも好きになれなかつた。

『幸せ』の形なんて人によつて違うけれど、それでもある程度の共通項はある。

恋に憧れた。愛に憧れた。ああなれたら、『幸せ』だろうと思えた。

誰のことも好きになれなかつた私は、『幸せ』にはなれないのではないかと思つた。

……なんて言うと、いかにも深刻な悩みのようだけど。実はとつぐに解決した悩みである。

転機になつたのは就職。トレーナーとして初めて担当を持つことになつて、契約相手を探して。

初めて彼女を見た瞬間、私は恋を知つた。

当然、その恋心を叶えるためにどうすればいいのかと私は頭を悩ませた。

まずは優秀な信頼できる大人であろうとして、次に少し抜けたところも見せて。嫉妬を煽れないかと他の人と仲良くもしてみて。

どうにも脈は無さそうだということに気づくのに、さほど時間はからなかつた。好きな人から恋人でも作れと言われるのは、中々にくるものがあつた。そういう目で見ていないという宣言のようなものだから。

だから。真っ当に惚れさせるのは諦めることにした。

他人にも自分にも厳しくて、でも優しさを捨てられない貴女だから。貴女のせいで私が傷つけきつと負い目を感じてくれる。

愛はいつか色褪せるかもしない。恋はいつか冷めるかもしない。ならば私からは罪悪感を贈ろう。私を見る度に思い出してもらおう。

それら全て、他人を縛るという意味では同じものだ。

仕込みは全て上手く行つた。態度のおかしさも、薬の正体も、予想よりもずっと早く突き止められた。

ただ一つの計算外は、罪悪感に押しつぶされそうな彼女の痛々しさに、私のほうが耐えられなかつたこと。

結果、自分でそうしたくせに、自分でバラすという不合理な行動をとつた。

これは本当に嫌われたかもな、と思ったところで。喜ばしいのか、悲しいのか。私の言葉は慰めの嘘だと思われたらしい。

それならそれでいいか、とも思う。元の予定に戻るだけのこと。

負い目があるのを良いことに、彼女の唇を奪つた。

人として最低なことではあるのだろうが、恋とはそういうものだろう？ 恋愛なんて、結局の所自分の想いの押し付け合いだ。

行為も、想いも。きっと間違っているのだろうけど。  
それでも、私は今。幸せだ。

# シリウスシンボリ。その後

『親愛なるシリウスへ』

『この手紙を読んでいる時、私はもうこの世には居ないのでしょう。なんて、映画かドラマぐらいでしか聞かないセリフを、自分が言う事になるとは思わなかつたけど。いや、書いてるだけだから言つてはいけない』

彼女の生活の痕跡は、ダンボール一つに収まってしまうほどのささやかなもので。彼女が暮らしていた部屋はすっかり綺麗になつて、無色に戻つた。

なんとなく漂つていた酒の匂いも、仕事柄しようがないと付けていた香水の匂いも、何もかも洗い流されて、知らない場所の様になつた。

『自分が死んだ時の事を考えて、誰に伝えたいかと考えて。浮かんできたのはシリウスの顔でした。まあ私には友達も家族も居ないから、消去法とも言えるけど。だから緊急時の連絡先をシリウスの電話番号に変えておきました。いつも急に訪ねてくる貴女への意趣返しでもあります。少しは驚いてくれたかな?』

彼女がどんな人間なのかを知る一助にくらいはなるのでは無いかと思って、開いたダンボールの底にあつた手紙。遺書。

敬語と話し言葉と常体が混ざった、掴みどころのない正しくない言葉の連ね方を、何故だか彼女らしいと思つた。

『さて、ここまで書いておいてアレですが。もし何かの手違いで私が死んでいないのにこの手紙を読んでいる場合。つまりは、家探しの末に見つけていたり、シュレッダーにかける手間を面倒くさがつた私の隙をついてゴミ箱から拾つたりした場合。ここから先は読まないでください。さつさと火でも付けて、こんな物があつた事も忘れてください』

手紙の一枚目はそこで終わり、後は長い余白が残つてゐるだけ。

果たして、彼女はどんな言葉を残してゐるのだろうか。生きる事に執着を持たず、アルコールで脳を麻痺させて、死を隣人としていた彼女に、心残りなんてものがあるのだろうか。

或いは、ただ、私への恨み言でも述べられているのかもしれない。

『二枚目です。どうやら私は本当に死んでいるようですね』

『なんとも言い難い気分です。この手紙を書いている私は確かに生きてゐるけれど、シリウスにこれを読まれてゐる時には死んでいる。少しだけ面白くて、少しだけ（上手い言葉が思いつかなかつたので思いついたら書き換えます）

そもそも、この手紙を讀んでいるのは私とシリウスが出会つてどのくらい経つた頃な

のでしようか。遺書を書いてすぐ？ 卒業はしているのかな？ もう大人になつていたり？ 或いは、もつと長く私達の関係は続いていたりするのでしょうか』

彼女と出会った頃は、引退などはるか先の事だと思っていた。後輩指導、ドリームトロフィーリーグ。現役ウマ娘としてやれることなど幾らでもある。

ただ現実。トレセン学園を卒業して、子供でも大人でもない存在として、境界線をフラフラーとしている。

そろそろ、大人にならなくてはいけない時期だ。

『私としては、シリウスとずっと過ごせたらいいと思つてる。一人は寂しいって、シリウスのせいで気づいたらしくて。フランリと貴女が訪ねてくる日を、私がどれだけ心待ちにしていたか、貴女は知らないのでしよう。まあ言つていないので当然ですが。シリウスその辺鈍そうだし』

そんな事は無いと反論させて欲しい。学園では、周りからの悪意にも好意にも割とすぐ気に気づいていた。

いや、しかし。笑顔の優しさの裏で本当は迷惑がついているのではと、彼女の本心を不安に思つていたのも確かだ。ただそれは、アンタの事が好きだったからだ。恋というのは、どうにも人を変えてしまう。

……なんて、手紙に反論したところで何も意味など無いのだが。

『こんな手紙を残しているからには、何かメッセージもあるのかと思つてゐるかもしれませんが、別に何も無いです。知つての通り、私は生きる事にはそれほど興味が無いから。だからこれは、独り言であり、日記のようなものであり、悪趣味な呪いです。貴女は、貴女に興味を持たない人が好きだつたのだろうけど、だから私と仲良くしてくれたのだろうけど。実際の私は貴女に焦がれていた。死んだ後なら、別にそれがバレても構わないし、シリウスは死人を嫌いになるほど冷たい人じやないから』

興味を持たない人が好き、というよりイエスマンは好きじやないだけだ。やることなすこと全部褒めてきて、何をされても喜ぶ。そんな相手との関係は、多分健全では無い。群れの頂点は孤独だから。ただ、対等な相手が欲しかつたんだ。

『遺書』というのに、私は意味を見出していました。感謝も、恨みも、或いは恋心も。自分が死んだ後に誰かに届いたところで何の意味も無いだろうと。今これを書いているのも、たまたま読んだ本にそんなシーンがあつたというだけで、本心から何かを伝えたかつた訳じやない。

でも、いざ書いてみると意外とペンは止まらないもので。どうせ読まれない、或いは読んだ事が私には分からぬ文章というのは、好き勝手書けて、少しだけ面白い』

死んだ後の言葉に意味が無いというのには同感だ。死体を幾ら罵ろうとも、墓前に愛の言葉を捧げようとも。得られるのは精々僅かな自己満足だ。嫌いも好きも、相手に伝

えなければ意味がない。

『さて、誰にも見られない、もしくは私が死んでからシリウスが見ているとして。私は何を残すべきでしようか。とりあえず思いつくまで、思い出話でも書いてみるとどうか。』

私がシリウスの事を考える時、いつも雨の匂いが一緒に浮かんでくる。初めて会った時。フラリと家を訪ねて来る時。6、7割くらいは、雨が降っていたと思う』  
初めては確かに偶然だが。それからは意図的だ。雨に濡れれば、アンタが世話してくれたから。

素直に甘える、なんてことが出来る性格にはなれなかつたから。言い訳を作つて、理由を付けないと不安だつた。

それに。雨に濡れて身体を冷やせば、相手の体温をより温かく感じられる。

『私は人付き合いが苦手だから。仕事以外で関わる相手なんてシリウスぐらいだつた。蔑みも憐れみも、あと性欲も？ ぶつけっこない相手は貴重だつたから、貴女と過ごす時間は心地よかつた。誰かの面倒を見るのも嫌いじやないし。ああ、ようやく残す言葉が思いついた。読むのを止めるなら今のうち』

手紙の二枚目はそれで終わり。ここまで来て、その言葉を。彼女が残したいと思つた言葉を見ない、なんて選択肢が取れるはずもなかつた。

『好きです。私は、シリウスの事が好き。もしかしたらこれが初恋かも、なんて言つたら笑うかな。』

『ごめんね、大したことじやなくて。いや、そもそも読んでいるのかも分かりませんが。なんで好きになつたのか、正直自分でもよく分からない。他に接する相手が居なかつたからか、貴女が優しかつたからか、どことなく似たような雰囲気を感じたからか、全部が少しずつ混じつた理由なのか。貴女に聞いたら分かる？ 知るかよ、つて笑い飛ばすだけかな』

それは、私が言えなかつた単語で、ずっと彼女の口から聞きたいと思う単語で、文字として読むだけでは意味のない単語。

一言、言つてくれればよかつたのに。そうすれば私は、アンタを思い切り抱きしめて、過去の誰よりも愛を込めてキスをしてやれたのに。

『シリウスと恋人になれたら。家族になれたら。きっと素晴らしい日々でしよう。私は家族というものがよくわからないけど、映画や漫画を見る限り、きっと幸せな関係性なのだろうから。休みの日に一人でダラダラ過ごして、毎日おはようやおやすみを言い合つて、辛い時は抱き締め合つたりする。』

ああ、願わくば。ここに書いていることが現実になつてくれていればいい。私が好きと言えたら現実になるのでしょうか？ こんな手紙を書いたことも忘れて、貴女と過ご

せる日々を送っていますように。願うだけなら自由でしよう？

人間は二度死ぬと聞きました。一度は自分の死。二度は友人に忘れられる死。こうやつて呪いを残しておけば、シリウスは私を殺さないてくれる。だから私はこうして手紙に残します。好きだよ、シリウス。誰より、何より』

『それから――』

「シリウス？」

聞こえてきた声に、現実に引き戻された。

「全然帰つてこないから来ちゃつた。何して、た……の……」

私が持つている物に気づいたらしい彼女の声が、明らかな動搖の色を帯びた。

「そ……！　にや……：読ん、だ？」

途中まで。今アンタが邪魔しに来たからな。そうやつて返せば見事な百面相を見せてくれた。

十分なネタは手に入つたし、少しだけ可哀想に思つて遺書を差し出してやれば、ひつたくるように持つていかれた。

「完全に忘れてた……最悪……どこまで……いや、やっぱ聞きたくない」

「アンタが私の事が好きつてところまでだ」

「あああああ！」

「ここまで動搖している姿は初めて見たかもしれない。あの儂げな、消えそうな雰囲気はどうへやら。

「いいだろ？ 別に。もう愛も語り合つて、お互に一番熱い所を触り合つた仲じやねえか」

「……シリウスだつて、小学校の卒業文集とか見られたくないでしょ？ それと同じだよ」

「別に、アンタが見たいなら見せてやるが」

「それ、代わりに続き読ませろつて言うよね？」

「こちらの思惑はお見通しらしい。残念だ。

「まあ、今回はちゃんと隠しておかなかつたアンタが悪い。ダンボールぐらいちゃんと閉めとけよ」

「……うるさい、いいからさつさと運んで」

機嫌を損ねた、というよりは照れ隠し。

とりあえず今夜はお望み通り抱きしめてやるとしよう。

相変わらず。彼女についてはまだ良くわからないことが色々あるが、焦る必要はない。

最近は、随分と彼女の考えていることが分かるようになつてきた。

ダンボールを持つて、外に止めてある車まで運ぶ。荷物は後部座席、彼女を助手席に座らせ、私が運転。

「じゃ、私達の新居に行きますか。運転よろしくね、シリウス」

「はいよ……アンタも免許ぐらい取れよ」

「お金無くつてさ。いいじやん、シリウスが居るし」

私が居る事を当たり前のように言う。それが無性に嬉しかつた。

「なあ」

「なに?」

「好きって、言つてみてくれよ」

「……手紙読んだから言つてるよね? それ」

その問いは肯定してやつた。やはり文字だけでは味気ない。どうせなら彼女の口から、彼女の声で聞きたかつた。いつもなんだかんだ理由をつけて逃げてしまうし。

「…………好きだよ、シリウス。うわ……恥ずかし……」

「…………なあ、行き先変えていいか?」

雨が降つていなくとも。これからは、ずっと共に。